
目指せ！死神！BLEACH異端編

バージル兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指せ！死神！BLEACH異端編

【Zコード】

Z6338M

【作者名】

バージル兄さん

【あらすじ】

何となーく生きていた主人公は行き成り死にます。

そして、死神に出会います。

その出会いから新たな物語が紡がれる

そんな面倒臭いストーリーじゃありません。

あ、鈍亀更新です

御不快に思われる方は迷わずBACKを

青年、死亡編 新たな出会い（前書き）

ハイ。突発的に書いてみました。

理由はアニメと漫画の碎峰を見て惚れたからです。

後、勝手気ままに書いていくので、独自設定等がかなり出ると思います

作者は原作を持っていませんから、ゆるーく流して下さい

青年、死亡編 新たな出会い

皆さんは散歩なぞされますか？

俺は良くします。

夜に歩くと空気が澄んでいて気持ち良いんですね
さて、その日もいつも通りに夜の散歩をしていた時です

「おお、こんな所に広場があるとは！」

散歩していると、偶に今まで見えなかつた物も見えて面白いんです
おや？

「見間違いや無によつですね～」

何か黒っぽいところかデカイ

何で仮面なんか被つているんでしょう？

それにして、デカイ

3~4mはあるだろ？

「お前、俺が見えるのか？」

バツチリと

何なんでしょう？

「会話できるなら教えてくれや。お前さんはなんだい？」

「俺は虚ホロウと云う

虚ホロウ？

初めて聞きましたね

「お前を殺す者だ！」

そつ言つて、飛び掛かつてきました
なに、その展開！？

「お前の魂を食べば、俺はさらに強くなれる
幽靈つて魂が食い物なんでしょうか？」

現実逃避から帰つてきました

現在、超追われています

しかも、段々後ろの声が『食わせる』から『クワセロオオツー』になつてきました

今日は厄日に違いない

「ニゲルナアアア」

逃げるに決まつているでしょう

うわあっ！今、掠つたつ！絶対、掠つた

しかし、死の恐怖つてこりうる物なんですね、お母様
先立つ不孝をお許し下さい

ザクツグチャ

グロい音と共に俺の腹になにかが突き刺さる
自分の血なんて見たくなかったよ

うわあ、背中から貫通して

余り痛みを感じるのは、何故でしょう？

そして、後ろからの悲鳴

え？

悲鳴？

振り向こうとしたら、出来ずには無様に転がつてしましました
背中から腹に貫通してゐるのに後ろに向ける訳がない

「もう大丈夫だぞ。お前を苦しみから解放してやるつ
誰ですか？」

転んでいるので見上げることしか出来ない
見上げると、そこには

とても綺麗（俺主觀）な人がいた

「あ、有難うござります。お名前は？」
会つて、3秒で名前聞くつて

ナンパ野郎じゃあるまいし
相当テンパつているらしいです

「…………碎蜂だ」「え？」

自己嫌悪に陥つていて、聞いてませんでした
もう一度お願ひします

「…………碎蜂だ」

碎蜂さんですか

良い名前ですねえ

そろそろ意識が無くなつて来たので、お先に失礼します
お休みなさい

side out

碎蜂 side

私はその日、本当に偶々そこを通りかかつただけだ
決して夜一樣を探していた訳では無い！

「助けて〜〜つ！！」

一人の男が虚ホロウに追われていた

その男は何故かとても軽々と攻撃を避けていた

「確か、あの虚ホロウは手配書に…………」

あつ。そんなことよりも助けなくては
急いで、空を蹴りソイツの元に駆け寄る

ソイツは何故か此方に視線を向けて固まり、そして、攻撃を受け倒された

おかしな奴だ

本当におかしな奴だ

「死神イイイ。お前もクワセロオオオ」

ふざけるな

「雑魚が」

一瞬で斬り伏せて、ソイツに駆け寄る

「大丈夫か。今、苦しみから解放してやります」

ソウルソサイティに送つて

何故か驚いたように大きく眼を見張り、口を開く

「あ、有難うござります。名前は？」

以外に余裕があるんだな

しかし、何故名前など知りたがるんだ？

「私の名前は碎蜂だ」

ちゃんと聞いているのか？

此方に視線が向いていないのだが

「だから、碎蜂だ」

今度は聞こえたらしく、嬉しそうに頬が綻んだ

そして、眼を閉じた

もうそろそろ靈体が出てくるだろう

そうしたら、もう少し話してみてもいいかもしれない

青年、死亡編 新たな出会い（後書き）

こんなの書く暇あつたら、バカ天？書こうぜ、俺。

青年、余話編 んで、送られる（前書き）

わあ、次は夜一さん登場編
夜一さんsideで頑張りましょうか

青年、会話編　んで、送られる

「で、お前の名前はなんだ？」

おや、先程の美人さん
確か、碎蜂さん

さて、俺は死んだ筈ですが

ふと、見下ろすと俺の身体が血まみれで倒れていきました

「俺、幽靈？」

しかし、随分とグロい死に方ですね

碎蜂さんの方を向くと、軽く頷かれました

「何とまあ」

「で、名前はなんだ？」

ああ、そういうえば名乗つていませんでしたね

「西東 杏里といいます」

「杏里か。宜しく頼む」

笑うとさらりに可愛いですねえ

そういうえば、死んだのに何故碎蜂さんは見えるんでしょう？

普通は幽霊なんて見えませんよねえ

質問してみると

彼女は死神だそうです

・・・・・俺、これから刈られるんですか？

「やついえば、杏里は何故虚ホロウが見えるのだ？」

何故と言われても

「何故かあの時はバツチリと見えましたが」

俺は20何年生きてきて初めて幽霊なんて見ましたからね

まあ、見た途端に殺されたので余り関係ないですね
で、それがどうかしましたか

行き成り何か呟きました

あのー。放置ですか
そうですか

「杏里。これから、私の上司に会つてもう。とても素晴らしい人
だから、きっとお前のことも考えて下さるだろ?」「

碎蜂さんの上司さん?

素晴らしい人らしいです
優しい人だといいですが

「開錠」

虚空に碎蜂さんが刀を刺すと扉が現れました
死神つて超能力まで使えるんですね
何か今日一日、吃驚体験ばかりです

扉を潜る前に礼をしたら、不思議な物を見る目で見られました

青年、余話編？ 猫をたまひですかね（前書き）

浦原さんって、いつこう喋り方でいいんですかね？
最近、百合ヶ子って聞かなくなりましたね。

青年、余話編？ 猫さん蝶のとですねえ

儂がそ奴を見たときは、面白やうに周りを眺めておる時じゅつた
ソレ、△魂界に普通の人間が来れる筈がない
儂は酷く興味を引かれた

「おや？ 猫、ですねえ？」

近付いていつたら、直ぐに気付きおつた

・・・・・・・・・・

咲

「捨て猫つて訳でも無いでしょつし、野良つぽくもありますね」

当たり前じゅつ

「良い」とこの猫なんでしょうねえ

「当然じゅ

「やじ

「・・・・・・・・驚いた。化け猫ですか・・・・・・・・

失礼な奴じゅ

しかし、驚いたと言つておきながら無表情とは本当に咲

もう少し驚いても良からうに

それに

「儂は化け猫では無いわ

「それでは、猫さん。お前は？」

フザケタ奴じゅ

「夜一じゅ。覚えておけ

「夜一さんですね。俺の名前は杏里です

杏里か、中々面白そうな奴ではないか

礼儀もしっかりしておるよじゅ

じ

バンッ！

む？

「おや、碎蜂さん。上司さんは会えましたか？」
ほつゝ、随分と嬉しそうに笑うではないか
「いや、それが何処に・・・・・・・・・・・・」
どうした碎蜂？

「夜一様！」

ぬお！？

ええい、行き成り抱きつくな
「ああ、夜一様。」このよつつな所にいるとは
話を聞けえええええ

「おや？ 碎蜂さんの上司は夜一さんなんですか？」

「あ、杏里！ 貴様、無礼は働かなかつただろうな！？」
離さぬか！

「多分、大丈夫だと思いますがねえ。それより、猫さん。苦しそう
ですよ」

だから、猫と言つな！

「はつ！ 私としたことが」

「ゴホン。杏里、儂と碎蜂でチト話があるから」

「ああ、分かりました。そこいらを散歩してきまーす」

side out

杏里 side

「いやあ、最近は猫まで喋るんですねえ」

何故か碎蜂さんに外に出るなと言わわれたので、そこいらを歩いてい

ます。

何か、面白い物はありませんかねえ

「おや？アナタ誰ですか？」

お？誰です

「誰と言われても、暇人とでも答えますか」
実際、暇ですし

「随分と変わった人デスねえ」

そうですか？

そういうえば、この人も死神なんでしょうねえ
何か十一つて書いた羽織着でますけど
偉い人なんでしょうか？

「それで、アナタ誰ですか？」

んー

「名前は西東 杏里です。アナタは？」

「杏里サンですかあ。あたしは浦原 喜助です」
浦原さん？喜助さん？どっちで呼びましょうか

「じゃあ、喜助さんで」

「本当に変わった人デスねえ」

褒められてるんでしょうか？

「喜助さんは何をしに来たんですか？」

「ああ、アタシも暇潰しに来たんデスよ」

仲間ですねえ

「それじゃあ、杏里サン。一杯どうデス？」

「はい？お酒ですか？」

「いいですよ。そんに強くないですけど」

「いいんですよ。時間さえ潰れたら」

「それなら」

『乾杯』

いやあ、ここのお酒美味しいですねえ

「杏里サンはどうして隊舎にいるんデス?」

「碎蜂さん連れこられました」

面白いからいいんですけど

「おや?珍しいデスね」

そうなんですか?

「彼女が男に興味を持つナシで
おや?」

「碎蜂さんは百合ヶ子なんですか?」

「百合ヶ子つて、まあ。そうデスね」

『杏里!それに浦原つー!』

吃驚しました

「どうしたんですか?碎蜂さん」

「セウテスよ」

「夜一樣がお呼びだ」

わかりました

「コレ、どうしましょ?」

散乱した酒器類

「後でいいんじゃないデスか?」

そうですね

「それでは、行きますか」

「そうデスね」

青年、余話編？ 猫さん喋るんですね（後書き）

次からは、修行？編に入ると思います

青年、会話編？

入りたかった

修行編（前書き）

入れませんでした

青年、会話編？ 入りたかった 修行編

「ああ。杏里に喜助、よく来た」
呼ばれて行つてみると、見たことのない褐色美人に名前を呼ばれました

した

誰ですか？

「碎蜂さん。夜一さんは何処ですか？」

あの黒猫は何処ですか？

豪快な音がしたので、正面を見ると褐色美人さんがコケっていました
痛そうですねえ

「杏里。何を言つているんだ？夜一樣なら、そこに居られるだろう
？」

そつ言つて碎蜂さんはコケてる褐色美人さんを指しました
え？

「本当ですか？喜助さん？」

「本当デスよ。あれが、夜一サンです」

信じられません

いや、さつきまで酒を飲んでいたんですから、幻聴の類でしょ
うに違ひない

「本当に夜一さんですか？」

確認の為に聞いてみましょ

あ、普通に頷かれました

やつぱり

「化け猫なんじゅ」「違うわッ…」…………だつて、猫から人間に化けたんでしょう?」
台詞を遮られました

「ほひらの姿が、儂の本当の姿じゅ」「そこまで言つなら、そなんどじゅうねん、しかし、

「呼ばれた理由を聞こてもいいですか?」

「お主が邪魔をするからじゅ」「が、溜息をつかれました

お疲れのようです

「まあよいわ。お主の遭遇が決まつたので話しておいつての俺の遭遇?

普通に転生なり、するんじゅないんですか

記憶を無くしたりして

「よひは杏里サンの靈圧が高いんで、死神にしようつて話テスか?」
死神つて、そんなに簡単になるものなんですか?

「で、どうするのだ。杏里?」

んー

どうしまじゅうか

といづか

「拒否した場合は?」

どうなるんですか

「貴様、夜一樣の提案を蹴るといづのか!…」

碎蜂さん?刃物は危ないですよ?」

「うわあっ！？今、絶対力スリましたよー！？」

盲信しそぎでしょ

流石に

「ちょ、ちょっとー（ヒュン）話し（ザン）を聞いて（ザシュ）下
さい」

マジで、怖いですよ

刃物はダメ 絶対

「夜一サン？先ずは総隊長に話を？」

「うむ。総隊長に話をしたら、意外に乗り気での。直ぐにでも会いた
いと」

「へえ。それは凄いデスね」

呑気に話してないで、助けて下さーよー

俺、そろそろ泣きますよ？

「くつ！何故、当たらんのだ」

本当に殺す気ですか！？

「そろそろ、止めにしませんか？」

え？

止めない？

そうですか

「碎蜂さん！」

なら、

「杏里、大人しく斬られる気になつたか
絶対、拒否です

「百合ヶ子って、本当ですか？」

因みに作者は、百合は認めますが、薔薇は認めません

何か電波が入りましたが

「貴様、そんな訳があるか！？」

今回も、本当にといいですね

と、いふことは

「俺が、口説いてもいいんですね？」

あれ？俺つて、こんなキャラでしたつけ？

やつぱり、酔つてるんでしょうがねえ

「え？あ、そのえ？」

おお、混乱してますね

非常に可愛らしい

「杏里、碎蜂を口説くのはそれ位にして」ひかりの話を聞くのじゃ

わかりました

非常に不満ですが、大人しく従いましょう

「口説つ！何を言つてるんですか、夜一樣！？」

「杏里サンは、碎蜂サンのこと好きなんデスか？」

「喜助さん。見てわかりませんか？」

「まあ、なんとなく脈ありっぽいですけど」

それは、嬉しいですねえ

「ええい、面倒臭い。杏里、付いて来い！」

はいはい

逆らつても、碌なことが無いでしょうし

青年、会話編？ 入りたかった 修行編（後書き）

次は、総隊長 side からです

青年、修行編？ 髪、何を置いても髪（前書き）

タイトルは余り関係ありません

青年、修行編？ 髪、何を置いても髪

総隊長 side

儂は四楓院夜一から連絡を受け、一人の男を待つてある
その男は死ぬ間際とは言え、虚ホロウを見、その攻撃をかわしたという
なんとも興味深い男よ

どうやら、来たよつじやな

「夜一さん。何時の間に3人に増えたんですか？」

は？

「増えるか！ はあ、走り回って、酒が回ったのじやな
「失礼ですよ。ただ、世界が回ってて、3～4人に見えるだけで
す」

「杏里、完璧に酔ってるぞ」

「杏里サンは面白い人デスねえ」

・・・・・・・・・・・・儂の覚悟とか、やる気を返せ

む。眼があつたな

「なんという、髪！ 素晴らしい！…」
「奴、頭が足らんのではないか？」

四楓院夜一の方に顔を向けると、思いつきり顔を反らされた

「これが、こ奴の普通なのじゃらつた

「髭さんが総隊長ですか？」

「髭ではない、山本総隊長と呼ばんか！」

「おお、碎蜂の蹴りが入ったわ

「碎蜂さん。蹴りは避けませんから、止めて下さる」

「知るか。大して痛くないんだろ？ もう立てる

汗々立ち上がり、こちらを見てくる

「山本総隊長、俺が死神になつた場合の利点を教えて下せり

「ふむ。やつと真面目な話が出来るな

「先ず、衣食住の確保じやな、みつけどのことをせんかぎりは保障

しよう」

「これはかなり食い付くのではないか？」

「元路上生活者を舐めないで頂きたいですね」

「なんじやそれは？」

「家が無いって、ことデス

「杏里、お前ホームレスだつたのか？」

「そつですよ。まあ、別にそう困つた覚えもありませんし、結構自

由に暮らしましたから」

「案外、暗い過去があつたのじやな」

「ふむ。しかし、衣食は興味があるのではないか？」

「で、他には無いんですか？」

「・・・・・・・・・・興味無いのか？」

「変わった奴じやな

「それでは、生きる力を与えるといつのは？」

「興味がありませんね。と、こうか俺はこのまま転生なり、なんな

りしてくれた方が楽なんですよ」

全く靡かんの

「杏里さん、良いんですか？」

「何がですか、喜助さん？」

「おま、転生したら、碎峰さんに会えなくなりますよ」

おお、
眼に見えてうろたえおつたわ

碎蜂か

「それは困りますが、まあ些細な問題ですね」
諦めるしかないかの

お詫びと申せば、お詫びながら愛する人たる

「しかし、杏里が……」

全く少しばかり着けといふのぢや

壁蛭は四極院夜
一筋しゃと思つてしたがの

Sideout

杏里 Side

卷之三

「喜助さん。俺には死神になる必要ない

大体、買収しようという考え方が気に入りません

「そこを何とか、お願いできませんか?」

さ、喜助さん！頭、上せて下ねこよーー！

これじゃ俺が悪人みたいじゃないですか！

「喜助さん、俺は別に嫌とは言つて無いんですけど、
「それでは、受けて貰えるんですね」
すつさく嬉しそうですけど、その笑顔が恐いですね

「総隊長、俺は貴方に聞きたいことがあります」
「なんじや、大抵のことなら答えられると思つが」

「その言葉、信じましょうか

「俺は貴方達に死神になれ、と言われてここに来ました」

「そうじやな」

「断つた場合は、転生ですか？」

あ、頷かれた

さて、後は質問じゃありませんが

「それだけかの？」

いいえ

「総隊長は一言たりとも、俺にお願いしてませんよね
そこが、一番気に入りません

なんか、プレッシャーが増しました

まあ、呼吸も出来ますし放つておいていいでしょ

「成程の、確かに儂らから欲しいと言つて置いて礼の一つもせんの
わ、問題じや」

分かってくれましたか

あれえ、後ろからのプレッシャーが増しましたよ？

「それでは、西東 杏里。死神になつてくれんかの？」
「喜んで受けいたします」

死神つて、どうやつたらなれるんですか？

side out

喜助 side

いやあ、一時はどうなることかと思いましたよ
さて、明日から杏里サンには靈院に通つて貰いますか
人材不足の折りにいい人を見つけられました

碎蜂サン様々デスねえ

「ふむ。明日から靈院に通わせて、使い物になるのはいつ頃かの？」
「彼の靈圧は高いですが、才能が分かりませんカラねえ」

「何とも言えんか」
「そういうことデス」

「杏里！」

「何です、碎蜂さん？俺、もう寝たいんですけど」

「どうか、彼つて

今、ただ靈圧の高いだけの靈なんデスよね
良く隊長格の靈圧で消し飛びませんね

「碎蜂にも春が来たかのう？」

「嬉しそうですね、夜一サン

「微妙じやないデスか？」

「二人共楽しそうデスけどね

「その」

「何ですか？」

「あの、だな」

「はい」

「ヤ。ヤセヤセヤセ」

「ヤ?」

テンパつてマスねえ

「夜一サン?」

「見どる方が面白いから、助けん」

アララ、つれないデスね

まあ、頑張つて貰いましょうか

s i d e o u t

杏里 side

碎蜂さん、やつきから拳動不審です 丸

ワンプレスで言えますが、本当に何をしたいのか分かりません

明日から、靈院といつどに通つて死神になる勉強をするそいつです
死神の学校つて恐い氣がします

碎蜂さん、落ち着いて下さい

「だから、主語を言つて下せー」

その連呼で分かるほど日本語に精通していません

「さけでも
さけ？」

鮭？明日の朝飯ですか？

「酒を飲まんかと言つてるんだ！」

あー。酒ですか
分かりました

「構いませんよ」

うわあ、超嬉しそう

美人と酒を飲むのは初めてですね

さつき、嘉助美形さんと飲みましたが
差し向かいで飲むんですか？

それとも、四人で？

「差し向かいですか？」

あ、固まつた

それはもう、完璧に

アニメとかだと、『ビシイ』と効果音が鳴る位に
可愛いなあ

「そういえば、嘉助さん？」

戻つたら、もう一度聞きました

「何デス、杏里サン？」

「俺、何処で寝るんですか？」

「む？碎蜂の部屋で構わんではないか」

問題発言ですよ

「俺としては一向に構いませんがね」
碎蜂さーん。いい加減戻ってきて下さい

「私と酒を飲むのが嫌なのか?」

帰ってきたと思ったら、なんてことを言つんですか

「嫌な訳ないでしよう」

「まあ、寝るところはそれこそ、廊下でもいいですし」

「邪魔じや」

「邪魔デスね」

酷い

「それでは、夜一樣。杏里と酒を飲んできます」

「お、おお。行って来い」

夜一さんが押されますよー

碎蜂さん。地味に手首が折れそうです
力抜いて下さい

side out

翌日、浦原喜助と四楓院夜一は連れたつて起こし（襲撃）に行き、
杏里の膝で眠る碎蜂を見て『春が来た』と叫び、二人に気付かれる
という失態を犯した

青年、修行編？ 髪、何を置いても髪（後書き）

想像したら、主人公が羨ましくて仕方がありません
靈院で苦労して貰うことにします

作者は、靈院意外は因果の鎖？の奴しか知らないんですが、それ以外にも死神になる方法つてありましたっけ？

青年、修行編？ 学校、普通に学校

「行つてらつしゃい、杏里サン」

「行つてきます。喜助さん」

さて、靈院前まで送つてくれたんですが

俺、何処に行けばいいんです？」

「おや？ 君は誰だい？」

振り向くと、クセツモでワカメのような髪型でたれ目な男の人が立つていました

「ああ。西東 杏里といいます。何か、今日からここでお世話をなさるそですか。宜しくお願ひします」

「随分と礼儀正しいねえ。僕は京楽 春水という者だよ」

じやあ

「春水さんで」

「…………君、良く変つてゐつて言われるでしょう」

あれ？ 何で分かつたんですね？

「新入生つて、ことは僕の方が先輩になるのかな？」

「春水さんは何回生なんですか？」

「僕は一回生だから、一つ上だね」

「そりなんですか。ところで、彼は？」

何か春水さんの後で凄い形相で立つてますが

「へ？ 彼？ う、浮竹」

浮竹さん？

「京楽！ 講義はもう始まつてゐるぞ！！」

何か、ビコビコと空気が震えました

…………何ですか？超能力ですか？

浮竹さん？は白髪で不健康そうな人でした

…………身体弱そうですね

「全く、君という奴は」

「浮竹、紹介したい奴がいるんだけど」

「ん？誰だい？」

「杏里君。おいで」

はいはい

「彼かい？」

「西東 杏里です。宜しくお願ひします」

「ああ。浮竹 十四郎だ」

それでは

「十四郎さんで」

「…………変わった子だね。君は」「一連続は地味にキツイです

「浮竹！京楽！……」

お？

side out

十四朗 side

現在、俺たちは院長室で話を聞いている
どうやら、西東は総隊長からここに送られたらしく

まあ、西東は嫌そうに院長を見ているだけだが

「で、俺は何処に所属になるんですか？」

「西東君は靈圧が高いが、基礎は出来ていないようだから一回生からだね」

「それでは、教室を教えて下さい」

「ああ。今日は見学で明日から、通ってくれ

眉をひそめる西東

「案内はそこの一人に任せること

はあ、胃が痛む

「んじゃあ、杏里君行こつか

「はー」

「はー」

「で、何から見る？」

「斬拳走鬼でしたっけ？」

「そつそつ。まあ、最初は座学だけどねえ」

「それでは、斬から

「うひちだよ

side out

京樂 side

「杏里君。ここで、斬の実技をするんだけど」

まあ、道場だね

良く山じいにやられたなあ

「見ても良く分かりませんねえ」

まあ、確かにそうだね

「あん？ 新入生か？」

丁度いいところにきてくれた

杏里君の相手をしてもらおうか

浮竹も同じことを思つたらしく
ぱっちり眼があつた

「うひなりますねえ。一手ご教授願つても？」

おや？ やる気だねえ

「はっ！ いいぜ。かかるときな」

「それでは」

両者木刀を構え相手を睨みつける

「初め！」

轟音

「弱いですねえ。先輩」

えーと

「杏里君。今のまじうかと」

「俺もそう思つたれ」

「斬り合いなんて馬鹿らしいですよ。隙をつければ、それにこした

ことはありませんし」

その意見には賛成だよ

だけどね

「木刀を投げつけて、蹴りつて」

「外道だな」

「失礼な」

いやいやいや

君にそれを言う資格は無いよ

相手はつと

「手前、ちゃんと勝負しやがれ！！！」

「喚かないで下さい。一日酔いなんですから」

ふ、一日酔いつて

「ああ、喧しい。分かりました。もう一度勝負しましょ」

「構え、初め」

合図と同時に駆け出す杏里君

今度は普通に勝負するのかな

「ふつ」

鋭い呼氣と共に綺麗な回し蹴りが・・・・・・・・・・・・

「おおーー！」

そりや、怒りたくもなる

「真面目にやりやがれ！」

今度は、警戒していたらしく杏里君の蹴りをかわして、反対に攻めに出る

「相手の士俵に合わせるなんて、馬鹿のやることです」

確かにそうなんだけねえ

正面から堂々と言わないよ、普通は

ガキイ！

お、鎧迫り合いでここまで持ち込んだ

「いのまま、押し切つてやる」

「力み過ぎです」

ふつと力を抜いて相手の脇をすり抜けながら、一閃

「惜しい。西東は剣道でもやつてたのか？」

確かに惜しい。

喧嘩慣れしてるみたいな動きだけど

「死にやがれっ！－！」
大上段に振りかぶりつて
隙が大き過ぎだね
「ふんっ」

いや、だからね

杏里君

「足刀つて、西東」

「君は拳向きかなあ」

斬の授業でここまで体術を使う生徒も中々いないだろうねえ

「んじゃあ、気絶しましたから、次行きましょ」

次は拳の授業か

side out

杏里 side

「で、又道場ですか？」

「道場でやつたり、外でやつたりその時によるねえ」

「西東、次は普通にやれよ

普通について

「普通にド突きあえと？」

「そういうことだ」

面倒ですねえ

「あー、丁度いいところに」

「あん？京楽か、ソイツは？」

「杏里君つて、言つてね。今日一日彼の案内なの」

「へえ。で、見学か？」

「そりそり。次いで軽く揉んであげて欲しいんだ」

何か不穏な会話が聞こえますね

「分かつた。軽くでいいんならやるわ」

「分かりました」

軽く流すぐらいなら

「それでは、始め」

合図と共に走り出し

「シャア」

先輩、意外に速いですね

突きを軽く受け流してつと

相手の後ろに回るように動きつつ、突きを放つ

「危なつ！？」

躊躇されたので、蹴りを

顔面に

叩きこみます

「ガツ？」

「杏里君、死角からの攻撃好きなの？」

好きといふか

「得意といふか」

喧嘩つて、駆け引きが大事だと思ひます

青年、修行編？ 学校、普通に学校（後書き）

次は、鬼と走の実践編

杏里君の斬魂刀って、えげつない感じの鬼道系だと思つ今日この頃
京楽 浮竹両者がこの時期なのか、全く自信がありません
途中出てきた先輩は、また出るかもしれません

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話（前書き）

バカ天？が進みません
多分、スランプです

反対にこいつのネタは阿呆みたいに出てきます

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話

「で、次は走ですね」

斬 拳ときたので

「うーん。 そなんだけどね」

「走はなあ」

？歯切れが悪いですねえ

「どうしました？」

「走術つて、靈圧のコントロールが出来ないと話しひにならないんだよ」

「西東は未だ出来ないだろ」

靈圧のコントロール？

「具体的にはどうこいつ？」

「うーん」

「難しいな」

三人で頭を抱えてみます

「そうだ。 杏里君、これが見えるかい？」

春水さんの掌の上に光る球が現れました

何ですか、コレ？

「コレが何か？」

「靈圧のコントロールの練習方法だよ」

「ああ、それなら確かに分かりやすいな」

「靈圧を感じて、掌に集中させる。 んで、球状にイメージする」

「それで、出来るはずだが」

まあ、やってみましようか

しかし、靈圧を感じるねえ
取りあえず、眼でも閉じてみましょーか

s i d e o u t

十四朗 s i d e

さて、どうかな
「京楽、どうみる?」
「分からぬえ。まあ、最初だしね。感じるどこのか見つけるのも難しいし」
確かにそうだが、西東は靈圧が高いし
それを操ることが出来れば
かなり簡単に走と鬼が出来るだろ?つ

『! ! ! ? ?』

突如、馬鹿みたいな靈圧が眼の前から噴き出した

s i d e o u t

杏里 s i d e

眼を開けたら、何とも形容し難い場所に立っていました

えーと、眼の前にあるのは・・・・・・・・
融けた様に曲がった建物群に

狂つた様に踊る人?

うわあ、眼があつた

にじり寄つて来たああああああああつーーー！

いらっしゃいませ、我が主

「誰ですーー？」

私は貴方 貴方は私

「禪問答ですかーー？」

いいえ、真実です

うわあ、痛そうな人？ですね

主。我が名を呼んで頂きたい

「名前？」

はい、私の名は『
』です

はい。聞こえません

未だ、速いのですか

帰りたいなあ

井、またお会いしましょ」

「はいはい。また、いつか

世界が揺れました

起きたら、何か周りに人だかりが出来てました
アレですか？集団リンチですか？
反撃しますよ？

「西東。身体に異常は無いか？」

特には

精神は無駄に疲れましたが

「で、この騒ぎは何ですか？」

「あー。杏里君、先ずは靈圧を下げて貰えないかな？」

はい？

靈圧？何のことですか？

「杏里よ」

おや？夜一さん。仕事は良いんですね？
碎蜂さんは何処ですか？

「今から言つことをやるのじや」

良く分かりませんが

頷いておきましたか

「心の中に箱もしくは錠前を描く」

なら、簡単な錠前で

「描いたか？」

「はい」

「次に、ゆっくりと閉めてゆく

「へんてこじつと閉めてゆく

はこばい

お?

「じつやい、成功のよひじやな」

「じつゆい」とです?」

「杏里。先ほどお主が出した靈圧は大体席官クラスじや」

席官? 何ですかソレは?

「二十席からなる死神の役職の一つじやな。お主はその内の五席位の靈圧を出したのじや」

良く分かりません

「夜一樣。危険では、無いのですか?」

「分からぬ。が、大丈夫じやんつ」

置いてけぼりです

この頃多いです

「で、十四郎さんに春水さん。走と鬼じつめす?」

「やつぱり、じつかズしてるねえ」

「少しほ取り乱す位しても罰は当たらんが」

何故か十四郎さんの顔が蒼いです
体調不良でしょうか?

「まあいいや。外でやつてゐみたいだし、行ひつか」
「はあ、胃が痛む」

そういえば

「夜一 わん

「何じや、 杏里？」

「今晚どうです？一杯？」

酒を猪口に注いで口に持つていい仕草

「やうひじやな。相伴に預かるとしようかの」

後は、総隊長だけですね

また、暇な時にでも誘つてみましょ

うか
「で、何処に行くんですか？」

「靈院の第三格技場だな」

「無駄に広い場所だよ」

さて、今度は何が見れるんでしょうね？

青年、修行編？ 取りあえず刀との軽い会話（後書き）

今のところ考へてる杏里君の斬魂刀

? 「狂え 韶華」

能力は、延々と自分に近しい者の悲鳴を聞かせ続ける

発動条件は、相手が刀の悲鳴を聞くこと

斬魂刀の見た目は、鍔元から刀身に向かつて真っ直ぐ伸びる紅い直刀

? 「旋れ まが 烏羽カラスバネ」

能力は、杏里君が見たものを曲げる

発動条件は、杏里君が曲げたい相手の全身を見ること

斬魂刀の見た目は、鳥の名の通りに真っ黒な刀身に黄色い鍔と柄の
ファルシオン

以上です

家の弟と一緒に考えました

どちらか、もしくは両方を足したもの出すつもりです

青年、修行編？

鬼道？魔法でじょうひ（前書き）

遅れましたね

青年、修行編？ 鬼道？魔法でしょ！

第三格技場

技術開発局局長、浦原 喜助が実験的に製作した空間制作技術を搭載し作られた修行場の一つ

広さは、本人曰く『取り合えず、現世位の大きさにしてみました』

そんな感じの説明を十四郎さんから受けながら、第三格技場と書かれた道場の扉を開けました。

眼の前には、果てし無い荒野

・・・・・喜助さんって、実は凄かつたんですね

「で、さつきから人が出たり消えたりしてるんですけど？」
あの瞬間移動みたいのが、瞬歩ですか

靈圧を足に込めるでしたねえ

「そうだな。許可は取つたから練習してみる」
何時の間に取つたんです？

うわあ、春水さんが嬉しそうです

さて、軽くやつてみましようか
「靈圧を込める。田的地を視認、確認。勢いよく踏み込む」
さて、

「……………痛い」

顔面から突っ込みました

「杏里君、大丈夫かい？」

声が笑つてますよ、春水さん

「笑いたいなら、じうぞ」

・・・・・・・・言つた瞬間、後悔しました

腹抱えて笑わなくてもいいと思ひます
軽く殺意を覚えます

「もう一度やつてみる、西東」
十四朗さんは優しいですね

s i d e o u t

春水 side

いやあ、久しぶり大笑いしたよ

しかし、

「浮竹。彼、また靈圧上がつてない？」
5席つて嘘だよね

山じいの訓練時位の靈圧はあるし

「まあ、四楓院 夜一に何か考えがあるんじゃないかな？」

「微妙なところだねえ」

怪しいよねえ、あの人

何考へてるのか、分からぬいし

「言葉による簡単な呪だけじゃあ、抑えられないからしねえ」

「まあ、言葉と想像だけではそんなものだろ?」

杏里君はどれくらいまで、靈圧が上がるんだろうねえ

「靈圧関係ならそれじゃ、浦原 喜助辺りがどうにかするんじゃないか?」

「あ、その可能性の方が高いね」

それこそ、靈圧を抑える装身具の類でも作れるでしょ

「しかし、杏里君は下手だねえ」

「確かにやうだが、そういうことは言わない方がいいんじゃないかな?」

いや、だって

「靈圧の密度もバラバラだし、安定してないし」

その所為で、さっきからコケテばかりだよ
まあ、最初っから出来ても面白くないしね

（主に僕が）

「しかし、西東はあれだけコケテ何で怪我しないんだ?」

「靈圧を高めて防御力上げてるんじゃない?」

「それが出来れば瞬歩も出来るだろ?」

「斬と拳の時には靈圧を込めて殴つてたし、無意識にやつてるんじ
やないかい?」

意識したら、出来ないみたいだけど

不器用なのか、器用のかどっちかなあ

それよりも鬼道はどうしようかな

今ままなら、絶対暴発するよねえ

杏里 side

出来ませんねえ
諦めましょうか
コジも掴めませんし
まあ、最初っから出来ても面白くないですね
何事も挑戦でしき
・・・・・・・・すいません、嘘です
めっちゃ悔しいです
ぶつちやけ負け惜しみです

「喜助さん辺りにやり方習いましょうか?」
教えるの無駄に上手そうですし
今日、終わったら頼んでみましょうか

「杏里君。まだやるかい?」「
「いえ、今日はもう良いです」
まあ、その内出来るでしょう

「次は鬼道か、西東。それじゃ、今田は見学で良くないか?」
何故です。十四郎さん

「靈圧のコントロールが出来ないのに、鬼道が出来るはずがないだ
うつが」「

顔に出てたみたいですね

そうですか、また靈圧のコントロールですか

- ・・・・・・・・斬、拳に絞るうかな
- 「瞬歩は使えるようになりますねえ」
- 「まあ、他の歩法云々は何となく出来てるしねえ」
- 「出来るる感じです

「今日のところは見学ですか」

「そうします」

「それじゃあ、行くか」

はい

「んで、先刻からバンバン火の玉やら、衝撃波？やらを飛ばしてるのが鬼道ですか？」

場所は第七演習場らしいですよ
ただの広場にしか見えませんが

で、皆さん集まって指先からレーザー？みたいな物を飛ばします
万国吃驚人間ショ ですね

「ああ。今やつてるのが、破道で、直接攻撃系。もう一つが、縛道

で、防御・束縛・伝達等を行うことが出来る」

破道ねえ

何となくやつてみたいですねえ

「やらせないからな、西東」

ジト眼で見ないで下さい

そんなに信用ありませんか、俺？

赤火砲とか、白雷とか聞こえるんですけど
非常に、面白そうじやありませんか？

「まあまあ、浮竹。一回位杏里君にやらせて上げてもよくなきかい

？」

有難う御座います、春水さん

「しかしなあ」

一発だけ、やうしてひかり訳にはこきませんか？

何です、溜息なんか吐かないで下わこよ
幸せが逃げますよ

「一発だけだぞ」

やつた！

春水さんとハイタッチを交わします

「今から三つ言靈を繰り返して唱えてくれ」

「はい」

ああ、楽しみですね

「君臨者よ」

「君臨者よ」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトのぬを冠す者よ」

「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトのぬを冠す者よ」

「焦熱と争乱 海隔て逆巻き南くと歩を進めよ」

「焦熱と争乱 海隔て逆巻き南くと歩を進めよ」

「破道の二十一『赤火砲』」

「破道の二十一『赤火砲』」

side out

春水 side

いやあ

これは予想してなかつたよ

「暴発で周りを焼け野原にするつて、どうよ」
いや、まあ元からただの広場だつたんだけど

「西東、大丈夫だつたか。おい、西東？」

杏里君は気絶か

まあ、面白かつたけどね

さて、

「何処に運べば良いと思つ？」

「分からん」

どうしようかなあ

「全く、杏里サンは面白いデスねえ」

「これはまた

大物が出てきたねえ

「浦原隊長? 何の用でここに?」

「杏里サンの様子を見に来たんデスがね。いやはや、本当に退屈とは無縁の人デスね」

退屈とは無縁ね。

確かにその通りだ

彼はとても面白い

杏里君は随分と高く買われてるねえ
「氣絶したんなら、仕方ありまセンね。連れて帰りましょうか」

「杏里君にはまた明日、と伝えて下せこ」

「西東に靈圧のコントロールを受けさせて下せこ」

「分つかりました。それでは」

軽々と杏里君を肩に担ぎあげて去つていへ

何といふか

「ブツ飛んだ人だねえ」

「ああ」

さて、明日も会えるかな

楽しみだねえ

side out

杏里 side

眩しい

眼が潰れます

「お、杏里。目覚めたか」

おや、夜一さん

おはよひびきています

「ひからに來い、今日は良い月が出ておる」

はいはい

窓際で酒を飲んでる夜一さんの近くに腰を降ろします
上を見上げれば、非常に美しい満月が煌々と輝いています
良いですねえ

「しかし、俺はびりしてここで寝てるんですか?」

「お主は鬼道の練習中に制御に失敗して気絶したらしきぞ」

おやまあ

「それはまた、『迷惑を』

「礼なら、喜助に言つてじやな

セツシマショウカ

「ほれ

はい？

杯？

「一杯付き合つてくれるのでじやハリハヘ..」

ああ、セツコえばセツでしたね

酒を夜一さんの杯に満たして
自分の分にも酒を満たしてつと

『乾杯』

堅く澄んだ音と共に口に近付け杯を干す
やつぱりこちらの酒は美味しいですね

「して、杏里よ。靈院はどうじや？」

「面白いですよ、知り合にも出来ましたし」

「ほう。それは田出度いの」

嬉しそうですね

その後も暫く無駄話をしながら、杯を重ねました
途中で喜助さんと碎蜂さんも来たので、皆で飲みました

・・・・・・・・・・・・途中から記憶がありません

頭がガンガンします

明日、いやもう今日ですね
靈院休みたいです

青年、修行編？ 鬼道？魔法でじょう（後書き）

さあ、喜助との修行フラグが立つたぞ

次の話は5年後位で、始解編と散歩編をやります

青年、実践編？ 刀と対話してみよう

「まだ我が名を呼んでくれませんか

主、まだ私の名を呼んでくれませんか

我らが主よ、名を呼んではくれませんか？

「また、あの夢ですか」

いい加減にして欲しいですね

狂った様に踊る女や体長3mはある鳥の名前なんて分かる筈がない
でしょ？

相変わらず景色は融けた様に曲がった建物群と狂った様に踊る女
それに黄色い鳥が増えただけの殺風景な景色

俺が狂いますよ、いい加減

「杏里サン。少し良いですか？」

喜助さん？

今日は修行はお休みの筈ですが

俺の記憶違いですか？

「はい、どうぞ」

「今日もまた靈圧がブレてますねえ」

良く分かりますね

俺はようやつと自分の靈圧に気付いたといふですが
感じるのに3年かかりました
才能が無いのかもしません

「夢の所為でしょ？」

「また、同じ夢テスか？」

はい

額くと溜息吐かれました

何故です？

「刀との対話を覚えて貰いましょうか、杏里サン」

刀との対話？

「ハイ。本当はもう少し時間をかけるつもりテシたが、やつも言つ
ていられないようテスからね」

なんとなーく嫌な予感がしますよ

「それでは、付いてきて下さい」

はい

side out

喜助 side

もう少し基礎を固めたかったんですが

刀が杏里サンを呼ぶなら仕方ありませんね
しかし、下手なところで解放されるとマズイテスからね
こちらで場所を提供させていただきマスよ

「喜助さん、ここは？」

「ああ、驚いてくれましたか

作った甲斐がありました

「ここはアタシが作った修行場の一つデスよ」

「ああ、中央に進んで下さいな

「結界、ですか？」

本当に勘のいい人デスね

「ハイ、杏里サンの靈圧は少し高めなので結界内で始解して貰いま
スよ」

「構いません、それでこの声から解放されるなら」

随分と嫌そうデスね

どんな性格なんデシヨウか？

「それでは、杏里サン。始めマスよ」

「はい。お願ひします」

結界内に入り、刀を抜き正眼に構える杏里サン

この結界が壊れたら縛道で留めなくてはいけないんデスよね

疲れマスよ

杏里サン、無駄に靈圧高いから

「行きマス」

「どうぞ」

「軍相八寸退くに能わず・青き門　白き門　黒き門　赤き門・相贖
いて大海に沈む」

言靈を紡ぎ空間に力を満たし、座標を設定し、その空間に向けて解
き放つ

四獸塞門

杏里サンの周りを囲む第一結界『反鬼』と第二結界『鎖縛』に四方を囲む『四獸塞門』
これが破られたら、鉄裁サンに土下座しないといけないんデスよね
どうしましょうか

さあ、後は結果を待ちましょうか

Siedent

杏里 side

あの結界、強力過ぎでしょう
結界内で意識を失ったのは初めてですよ

「で、また」「ですか」

喜助さん曰く、『刀と会話して下せ』らしいです
分かりません

よつゝこそ、我が主

ようこそ、私の主

はめ、

「今日は、名前を聞きました」

・・・・・・・・・・歓喜に震える鳥と女

嫌な風景ですね

おお、我らが主

いや、そんな感動する程のことですか？

さて、名前ねえ

「先ずは、鳥から行きましょうか
サクサクと

我が名は『

何故、聞こえないんです

』
羽

微妙に聞こえました
羽？

我が名は『鳥羽』

ほう

「鳥羽とは、また面白い名ですね」

ああ、圭よ。やつと呼んで下せった

「さて、アン？・・・・・・・・・・・・・・隨分と俺好みの能力ですね」

成程、確かに俺の分身らしいですね

とこつ」とは、こちらの女も

「で、貴方の名前は？」

私の名前は『響』

響?

『響華』

響華?

「響華? とは随分と綺麗な名前ですね」

ああ、やつと名前を呼んで下せつた

「何とまあ、能力まで俺好みとは気に入りましたよ。二人共」

それでは、我らが主よ

ええ

「『狂え 韶華』『旋れ 烏羽』」

「スバラシイ サイコウテス サア、モットセカイヲクルワセマシ
ヨウカ? ソレトモ、セカイヲマゲテ マゲテ マゲテ タノシミマ
ショウカ?」

主、そろそろ外に出て力を奮いましょう

イイデスネ

ソウシマショウカ

眼を閉じて、意識を集中しセカイを壊すイメージをし眼を開ける

結界が揺らぐ気配と意識がブレル感覚が混じる

えい、愉しみましょうか？

sideout

青年、実践編？ 刀と対話してみよつ（後書き）

杏里君がアレなのは仕様ですから、気にしないで下さー

次は喜助さんをフルボッコにして、九割殺しに遭います

青年、映戯編？ 声優さんと繋りこなす（漫書）

中途半端

#やつし母途半端

戦闘描画なんて嫌いだ

青年、実践編？ 喜助さんと戦つてみよっ

喜助 side

本当に馬鹿みたいな靈圧デスね。杏里サン
あの結界に罇を入れるには最低でも隊長格位の靈圧が要るんデスがね

仕方ありません、縛道の準備もしておきましょっか

また、靈圧が上がりマシたね
解放出来た様デス
罇も大きくなりマシたし

高く澄んだ硝子が割れる様な音と共に結界が砕け散った
うわあ、土下座しないと行けないんデスか？
逃げようかしら

「見事に結界を壊してくれマシたね。杏里サン」

「いやあ、何というか。すいません」

いや、別に構わないんデスがね

それよりも

「刀が一本とは、二刀一対型では無いようデスし、一本共違う刀デス
スか」

「はい。左が響華 右が鳥羽です」

禍々しい感じがする刀デスね

「さて、帰りましょっか。喜助さん」

「ああ。そうデスね。杏里サン能力は知ってるんデスか？」

「はい。何なら試してみますか？」

おやおや、随分と自信が有るみたいデスね
そういうのは碎きたくなりマス

「良いでしょ。杏里サン、構えて下サイ」

『起きろ 紅姫』

さあ、始めましょうか

「次は、こちらの番ですね。『狂え 韶華』」

金属音、いえ、悲鳴？

悲鳴 悲鳴 悲鳴

頭にこびり付いて離れない

鬼道系の能力デスね

それにしても趣味が悪い

最悪の能力デスね

それにしても、この声どこかで聞いたような気が

「これが、響華の能力ですよ。良い感じに狂つて俺好みです
これは、かなり精神的にクル物がありマス

わっわと終わらせて、

瞬歩で近付き一閃

杏里サン曰く、響華で防ぐ

更に上がる悲鳴

・・・・・・・・・・アタシを狂わせるつもりなら、この三倍は持つて来て頂きマショウか

「これで、終わらせてあげマス」

これ以上聞くと流石に温厚なアタシでもキレマスよ

「こひらの台詞です。『旋れ 鳥羽』」

チツ、もつ一本デスか

こひらを見る杏里サン

瞬間、あの眼を見ていけないと感じた

逃げる

恥も外聞も無く

杏里サンの視線から逃れる様に

「鳥羽の能力は俺の眼に入った全てを曲げる、といつとも素敵な
能力です」

クツ

「血霞の盾」

刀を前に突き出し、盾を作り

杏里サンの視線を遮るように前へ突き出す

杏里サンの視線がこひらの腕に注がれ

次の瞬間、ポキンとあつたりとした音とともに腕が折れた

「ギヤアアアアアアアアアアアアアッ！？」

何故デスか！？

「アア、良い感じの悲鳴ですよ。喜助さん。さあ、もつともつとも
つともつともつと俺に悲鳴を聞かせて下さい」
もう逝つてマスね、杏里サン

応急処置は済みマシたが、予想以上に厄介な能力デスね

「その腕を斬り落としてみますか?」

「アア、イイデスネ イイデスネ イイデスネ モツトタノシミマ
ショウコウ キスケサン」

狂い過ぎテシヨう、流石に

「サア、狂ツテ旋^{まわ}ツテ踊ツテ壊レテ愈シミまじょうよ。キスケサン
「戯言に付き合つてゐる暇は有りません」

延々と夜一サンの悲鳴を聞き続けるのも身体に悪いデスからね

「モウスコシアソビマシヨウコ」

「アタシはあつさり終わらせたいンデスよ」

杏里サンの死角に回り込みながら斬撃を放つがあつさつと受けられる
予想通りデスね

杏里サンに手を伸ばし

「縛道の九十九禁」

杏里サンの手前で拘束するようにバラける鉢とベルト

「舐めないで欲しいですね」

杏里サンが見た途端に曲がり、歪み碎ける縛道

・・・・・縛道まで曲げマスか、アナタは

「でも、無傷とはいきよいようデスね」

半分程消し飛ばされましたが、何とか拘束には成功しました

次いで

「縛道の九十九 第一番 収^{ばん}禁 初曲 止繩^{じつじやう}」

拘束完了?デスかね

「しかし、杏里サンの眼を抉る位しないと能力を抑えられませんね
そこまではやりたく有りませんね

「休憩ですか？喜助さん？」

何デスつて？

九十番台でも止められないンデスか？

「式曲 ひゃく連れん門」

なら、痛みつけて寝て貰います

「だから、鳥羽を舐めないで下さい」
声が聞こえた途端に曲がり始める鉄串
千里眼でも持つてるんデスか、アナタは

「終曲 ばんきんたい太封」

拘束は破られて無いンデスから、このままいかせて貰いマス

杏里サンの頭上に巨大な碑石が降りかかり、そのまま潰しにかかる
これでどうデス？

「旋り狂え」

杏里サンの声が響き、卍禁太封が防がれた
どうやったんデス！？

縛道が解け、杏里サンがこちらに向く
これは諦めて義眼の用意をしましよう力？

「さあ、次はどうします。喜助さん？」
案外、ピンピンしてマスねえ

「さて、本当にどうしてやりマショウか？」

高速で杏里サンの周りを走り回り

前後左右 縦横無尽 四方八方 容赦なく斬りかかる

斬撃が逸らされ、躊躇される

本当に後ろに眼でもついてるのデショウか？

「さて、真っ向勝負と行きましょうか？喜助さん」

・・・・・・・・あれだけの斬撃を大した被弾も無く

こちらを見詰める杏里サン

本当に始解したばかりとは思えませんね

「そうデスね。そろそろ終わりにしましょうか？」

切つ先を杏里サンに向け、いつでも斬りかかる体制を作る

杏里サンがこちらを見た瞬間に斬りかかる

「旋げないんデスか？」

「気付きましたか、喜助さん」

ええ

何となくわかりましたよ

「アナタの鳥羽の能力は、アタシの身体全てが視界に入らないと発動しない、違いますか？」

「正解です。何時気付きました？」

真っ向勝負の力技なら、こちらが有利デスね
悲鳴が鬱陶しいぐらいデスか

「最初にオカシイと思ったのは、アタシの腕を折った後デスね。普通なら追撃として足でも折るのにそれをしなかつた。いえ、出来なかつた。違ひマスか？」

要は、杏里サンの視界から一部でも外れれば良いんデス
何も言わず刀に力を込めて、口チラの体勢を崩そつとする杏里サン

沈黙もまた答えなりデスね

しかし、鍔迫り合にはともかくとして、アタシの方が不利な気がし
マスね

「延々と悲鳴を聞かせ続ける響華の能力で恐いのは、認識すること

デス」

「ええ。それが誰の悲鳴か気付くかどうかで、随分威力が違います
本当にエゲツナイ

杏里サンの腹に手を添えて

「破道の六十三 雷吼炮」

モロに喰らつたらしく吹つ 飛ぶ杏里サン
これで氣絶て下サイよ

「さて、どうしマスかね？」

「何をですか？」

「うおうつ！？」

飛び上がる程驚くつて、アタシは始めて自分で体験しましたよーー！

「あ、杏里サン。しつかり無傷なんデスね」

刀を鞘に納めてマスから、もう戦る気は無いんデショウね

「結構痛かったんですがねえ。まあ、腹も減ったんで帰らつかと」

成程

何かもうじうじうでもよくなりマシた

「それじゃあ、帰りマスか

「はい」

青年、実践編？ 嘉助さんと戦ひこなみひ（後書き）

次回から、タイトルが杏里君、散歩編に変わります

追伸

近代哲学の祖の片割れ様から、京楽さんと浮竹さんなりかひの時
期隊長でしょ、という有り難い情報提供がありました。

この情報ベースで動きます

杏里君、散歩編？ 拉致監禁は最終手段（前書き）

ぶつひやけると最後の碎蜂が書きたかつただけの話

杏里君、散歩編？ 拉致監禁は最終手段

「杏里よ、付いてくるのじゃ」

夜一さん

「俺、書類作成中なんですけど」

「そんな物は知らん！」

困るのは夜一さんですよ

まあ、何とかなるでしょう

「で、何処に行くんです？」

「付いてくれば分かる」

はいはい

夜一さん、襟首持たないで下さ
地味に決まっていて痛いです

「（ゲホ）で、ここ何処です」

喉が痛いです

呼吸が出来ませんでした

場所は何処かのお屋敷？

武家屋敷っぽいですねえ

まあ、居る場所は堀の上ですけど

首を擦りつつ周りを見廻します

「ここには、朽木家の本宅じや」

朽木家？

お偉いさんですか？

初耳ですが

「貴様、何しに来た……」

突然の怒号

「ここで会つたが百年目、今日ここに息の音を止めてくれる！」
真つ直ぐ夜一さんを見ながら物騒な台詞を言つてくれるのは

綺麗な黒髪を首元まで伸ばして、綺麗な顔を憤怒の形相に変えた美青年

誰です？

「フッ。白哉坊、お主が儂に追いつけるはずがなかろう！」

不敵に笑う夜一さん

遊んでますね

しかし、何かお兄さんっぽい人ですねえ

そうですね

「白兄さんと呼びましょ！」

え？ 夜一さん？

さつき、白兄さんと追いかけっこに行きましたよ

超笑顔です

そして、放置です

・・・・・・・・・・帰ろ

「そこ」の御仁は四楓院夜一の知り合いか？

はい？

今度は誰ですか？

何か白髪混じりで、貴禄のあるとか、無駄に迫力のある御老人が立っていました

何というか昔の老中といつか御家老といつかそんな人ですね

ここの人ですか？

「確かに夜一さんの知り合いです。失礼ですが貴方は？」

「儂は朽木 銀嶺。白哉の祖父じゃ」

へえ、白兄さんのおじいさん

苦労の多そうな、といふか苦労させられているといつか

「まあよいわ、茶くらいなら出してやる。上がりなさい」
はい、御馳走になります

「儂も馳走になろう」

へ？

「白哉は？」

「フツ。まだまだ、若い者には負けんよ
夜一さんもかなり若く見えますがねえ
で、答えになつてませんが

白兄さんは？

「途中でへばつたので、置いてきた
「胸張らないで下さい。夜一さん」
由縫でやめないとではあつませんよ

結局今田中には帰つて来れず、拾いにいったそつです

一番隊隊舎

『夜一様は何処だ！？』

『クソつたれが！！』

『夜一様！夜一様、何処です！…』

「置手紙や言付くらいいしても良かつたんじゃないですか？」
「面倒じやつたし。仕事も書類ばかりじや、気が滅入るわ」

「この人、最低ですね
いや、別に構わないんですけどね

さて、仕事に戻りますか

side out

side 碎蜂

「夜一様、仕事をとぼつて抜け出さないでトセーーー。
全く

杏里も杏里だ

「止める位しても、いいのでは無いか?」

羨ましい

夜一様と一緒に出かけたなんて

「怒られましたね」

「仕方あるまい、ここは大人しく」

「何が大人しくですか!!」

全くこの人は

真面目にやれば、直ぐ終わるのに何故しないんですか

「書類仕事何ぞ面倒臭くてやつてられるか!」

無駄に格好いい台詞です

隊長としてはダメですが

「さて、俺は自分の仕事に戻らせて頂きますよ

「逃がすか!!」

夜一様、そんなに仕事をしたくありませんか?

そして、杏里に抱きつかないで下さい!..

「取りあえず、碎蜂さんもノッテないで離れて下さい」

「杏里、儂を見捨てるというのか?」

「杏里。夜一様を思つてここで仕事をしてくれないか?」

多分、これで夜一様もやってくれるはず

「分かりました。さっさと片付けましょ!」

よし!..!

「……………夜一さん？」

「な、何じや？杏里」

「俺は書類で埋もれて死にたくないんですが？」

「私もです。夜一様」

「分かつたわ。そつ、喚くな。さつと片付けるわ」

「碎蜂さん。この書類の担当者を明田呼びつけて説明させて下さい
「碎蜂。この帳簿を付けた奴は四則演算が出来ないのか？」

私は二人の秘書ではないのですが
というか、杏里。そういうことは自分でやれ
夜一樣、ただの計算間違いにキレないで下さい

「で、何だかんだやつてたら最後の一枚ですね

「それもこれで終いじゃ」

「お疲れ様でした、夜一樣。お茶をどうぞ」

「うむ」

「杏里、茶だ」

「有難う御座います」

仕事も終わり私の入れたお茶で一息吐く夜一樣と杏里

私は幸せ

こうこう何気ない一時が幸せといつものなんだろう

「やつぱり美人の入れたお茶は美味しいですねえ」

「ブウウ　ツ？！？」

・・・・・・・・・・・・・・口に含んでいた茶を吹いてしまった

書類は無事だ

良かつた

「碎蜂に、の間違いじやろ？。杏里？」

「手厳しいですねえ。夜一さん」

にやかに話さないで下さい

どう対応していいか分かりません

「ヨリヒコ、おやつ。今日は腹の

卷之三

卷之三

ああ、何で間抜けな声を夜一樣の前で出してしまったんだ
しかし、夜一樣は何と言つた

お
古里の部屋に泊まる(?)

「ほれ、さつさと行つて来い」
女、夜一樣？

眼が笑つてませんよ

「」であります。

sideout

夜—side

「杏里よ。お主も速く部屋に戻るがよい」

石蠅は今頃
畠圃の畠圃で體を少しに這ひたし

「夜一さん。喜助さんに会うなら、気をつかるよりは伝えて下せ。」

גַּם־בְּבָרֶךְ־בְּבָרֶךְ

最近、護廷十三隊の出動回数が増えているそうですね」

それがどうしたかの

「どうもキナ臭い匂いがしますから」

奴は何が掴んでおるのか？

まあ、そここいら辺は喜助の仕事じゃ

side out

杏里 side

俺の部屋狭いんですよねえ

「碎蜂さん。蒲団一組しかないんで、今日はこれで寝て下さー」

「杏里は何処で寝る気だ？」

「俺は床で寝ますよ。流石に一緒に寝る訳にはさせんから」

さて、何処で寝ますかねえ

「……………別に構わないんだが」「はい？」

「すいません。聞こえませんでした。何て言いました？」

もう一度お願ひします

「私は別に杏里と寝ても構わないと言ったんだ！…！」

いや、そんな顔真っ赤にしながら言われても
まあ、可愛いからいいですけど

「本当に良いんですか？」

「クドイぞ、杏里。私がいいと言つててんだから、良いんだ
うわ、何この可愛い生き物？

抱きつきたいなあ

でも、前やつて投げられましたし

「じゃあ、蒲団出しますか

「あ、杏里？ その、私は「いつ」とは初めてだから、その、優しくして欲しいんだが」

「俺の理性が簡単に融けそなこと言わないで下さい」

side out

杏里君、 散歩編？ 拉致監禁は最終手段（後書き）

もつやるわん喜助さんと夜一さんを現世に放り込まないと不味いで
すね（汗）

散歩編は後2～3話書いて、ルキアとか恋次とかの時代書いて尸魂
界に一護たちを放りこむ予定です

杏里君、散歩編？ ぶりっこみよつ（前書き）

駄目だ、死亡フラグしか立つ気がしねえ

杏里君、散歩編？ ぶりっこみよつ

「 セヒ、 今日 一 日 どうしましてかねえ？」

休みの日つて何をすればいいか、 考えている間に終わりますからねえ
まあ、 セヒこののがいいんですね

「 破峰さん今田一田仕事ですし、 夜一セヒや轟助さんまでしこん
でしおうね」

「 まあ、 適当にじぶらつきますか」

運が良ければ面白こものを見れるでしお

「 ジのハゲツ……何でウチが手伝わんとアカンねんつ……」
「 だから、 間のこきなりキレの癖、 正直引くよ、 と何度も言つてい
るだろ?」
「 聞しこわつ……」まあ、 「 ハカラッ……」

「 全く聴しこ娘だよ、 君は」

「 何か、 面白そつな気配がしますね」

「 オヤ、 誰ですか?」

『西東』

!—

「 手前、 殺す」

誰ですか？

「覚悟しろ！！」

何かいきなり襲われました

反撃しますか

しかし、

「遅いですねえ」

もう何というか

遅いとしか

「で、どうしまじょうか？」

取りあえず、気絶させましょうか

蹴りが来たので、それを躊躇しながら、軸足を払いバランスを崩して、
接近

「一人目」

拳を固め、鳩尾に決める

「グハツ」

身体を折り曲げて、蹲る誰か

次いでだから、止めてしま jóうか

蹲る誰かの頭を思いつきり踵で踏みつける

眼の前に飛び込んで来た拳を屈んで躊躇して、地面に手を付く
そのまま、身体を捻り蹴りを放つ

後、一人ですね

「手前、絶対許さねえ」
いや、襲ってきたの貴方達ですし

うわあ、この人刀抜きましたよ

「さて、正当防衛つてありましたつけ?」

良く覚えてませんねえ

『喰らえ 劫責』
（じかくせき）

始解までしますか、貴方は

面倒ですねえ

「こいつもやりますか 『狂え 響華』」

瞬歩で近付き、一閃

「や！」までやつ！』

硬質音が鳴り響く

止められましたか

誰ですか？折角、テンション上がりだしたのに
邪魔しないで下さいよ

そちらに視線をやれば

先ず、金髪？蜂蜜色？の無駄に長い髪に人を探るよつたな眼
つてか

「平子隊長ですか、退いて下さこ」

「アホ。退けるかいな」

むう

「杏里、お前何してんねん?」

「売られた喧嘩は高く買うが、俺の信条です」

「全く困った人達ですね」

おや、惣右介さん

「で、この騒ぎの原因はなんですか?」

惣右介さんの目が恐いので、大人しくしていましょうか

刀を鞘に納めて、向き直り事情説明

「アホやな、杏里に席官が勝てる訳ないやろ」
嬉しくない評価ですねえ

「全く、この事は五番隊で処理しますか。平子隊長?」

「そりやな。その方がええやろ」

お咎めなしですか?

両方ともに

「んじゃあ、俺は帰りますよ」

「ああ、はよ帰り」

「西東君。またね」

はいはい

そうだ、下に降りて冷やかしでもしまじょう

全く堪忍してくれや

「面倒事は「メンヤで、ホンマに」

「仕方ないでしょ。我々で処理しなければ、色々と面倒なことになりますから」

そりなんやけどな

「で、お前等何処の隊のモンや?」

「俺は3番 こっちの一人は6番隊です」

ローズんどこと朽木隊長ンとこかいな

また、面倒な

「どうして西東君を襲つたんだい?」

「俺たちは靈院時代にアイツにノサれたことがあるんです。で、その仕返し」

アホや、こいつら

「どうします、隊長?」

「どうするもいづるもあるかいな、表に出せんぞ。こんなじょーもない」と

「まあ、確かに。それでは、厳重注意って所ですか?」

「そやな。それが、ええやろ」

「お前等」

『ハイツ』

「もつ杏里に喧嘩売るなよ」

『ハイ』

・・・・・・・・・

「ハゲ真子！－！ナンで居るねん！－！」

やかましいわつ！

折角、人がシリアス決めとつたのに
何潰してくれてんねん

ひよ里に向き直り、何時も通りの舌戦をワイは始めた

side out

杏里 side

さて、何か面白い物はありますかね？

「西東副部隊長」

おや？

アナタは確か警邏隊の人ですね
俺、担当監理隊何ですけど

「何がありましたか？」

「夜一樣からコレを渡すように、と」

そう言つて懐から書類を渡す彼
あれですか？仕事を手伝えと？

「有難う御座います」

「それでは

さて、何でしょう

…………面倒そうですねえ

杏里君、熟読中

「さて、誰かいりますか？」
「ハイ。どうしますか？」
さて、いつから付いてきてたんだか

「それでは、警邏隊に各隊の隊長・副隊長格に警告をして下せー。
檻理隊には、各隊の主要人物を警戒するよつこと」

「隊長 副隊長もですか？」

「ええ、どうにも嫌な予感がしますから」

「分かりました。それでは、そう伝えておきます」
「頼みましたよ」

さて、帰つて仕事しますか
伸びを一つして帰り支度をします

しかし、あの惣右介さん何か違うような
気のせいですよね

杏里君、散歩編？ ぶらつこてみよつ（後書き）

駄目ですね、あの結婚詐欺師と絡ませると死亡フラグしか立ちません
ちなみに杏里君がいつまでも仕事してないのは不味いだろと書いた事
で、隠密機動に入らせてみました

杏里君、散歩編？ 結婚式に「」案内（前書き）

久しぶり、本当に久しぶりの投稿

杏里君、散歩編？ 結婚式に「」案内

「中間報告書」

仕事中に白兄さんが来て、招待状を渡してくれました
白兄さん、結婚するんですね

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

「それで兄弟にも来て貰いたくこの招待状を出したんだが…」

何で俺何でしょうねえ？

第9回

「行きますよ」

そんなに嬉しいですか？

さて、白兄さんのお相手は誰なんでしょうか？

「で、夜一さんは寝坊ですか？」

「そうだ。それと、杏里。私は招待されてないんだが？」

「折角、可愛い服着てるんだから笑つて下せりよ」

口をパクパクさせて何か言いつゝある碎蜂さん

俺、何か変な事言いましたかねえ

「杏里、お前も呼ばれたんか？」

「おや、リサさん

「ええ。白兄さんから来て欲しいと」

「へえ、ウチんとこには八番隊隊長・副隊長へつてだけやつたで
？白兄さん？俺、偶に一緒に茶を飲むくらいの仲なんですが？」

「あー、杏里。邪魔したわ、またな」

何故か、気まずそうな顔をして去るリサさん
何かあつたんでしょうかねえ？

「杏里？」

「おおづ？」

わつきまで機嫌が良かつたのに、なんですかー？

「いやー、大変だねえ。杏里君も」

「春水さん、理由が分からないんですつて、碎蜂さん、刀抜かない
で下さいよー！」

「ハハッ。モテる男は大変だね。頑張つてね～」
ああ、味方が去つていく

「杏里、少し向ひにイコウカ？」

恐ッ！？怒つた理由が分かりません！

ああ、皆さんの生温かい視線が突き刺さる

夜—side

いやあ、すっかり寝過ごしてしまったわ
折角、白哉坊から誘いがあったのに
寝過ごすとは

まあ、何とか間に合ひそつじやし良しとするか

しかし、相手は誰じや？

肝心要の一一番重要なことを聞くのを忘れておったわ
まあ楽しみは最後にとつておくものじや

『ちよつ！？雀蜂つて、俺死にますよ！？』

『五月蠅い！大人しく当たれ！！』

『誰か、碎蜂さんを止められる勇者は！？』

・・・・・あ奴等は何をしておるのじや？

君子、危うきに近寄らざと言つからいの
儂は行くとしよう

杏里の「とじやから、死ぬ」とはなかろハ
・・・・・多分

side out

杏里 side

つ、疲れた〜

やつと、碎蜂さんの機嫌も直りましたよ

『それでは、これより我が孫 白哉との妻 緋真との婚礼の儀を始める』

あちやー もう始まつちやいましたよ

「じゃあ、碎蜂さん。行きましょうか?」

会場入りは難しくても、壇の上から眺めるへりこなら出来るでしょうね

緋真さんですか

どんな人なんでしょうね

「杏里。その、スマン」

何か謝られました

「構いませんよ。それより、見物に行きましょひつよ」

碎蜂さんの手を取り、会場に向かう

ああ、楽しみですね

「ああ、全く綺麗ですね」

白無垢を着て、白兄さんの隣に座る女性

あれが緋真さんですか

「ああ、綺麗だ。だが、何か傍げでもある」

良く見てますねえ

あ、普通に近付いたら入れてくれました
門番、良い人ですねえ

「む、杏里に碎蜂。来ておつたのか?」

「おや、夜一さん

ちゃんとした格好で来たんですね

安心しました

「夜一樣。次は寝坊しないで下さいね」

「次はな」

まあ、何て信用ならない言葉

次は起こしに行きましょう

『これにて、朽木家婚礼の儀を終了する。客人達よ。礼を言つぞ』
何か無駄話してたら、終わりました

どうしましょうかねえ?

「ほれ、杏里。行くぞ」

ハイ?

何処行くんです?

「白哉坊をからかいにじや
うわあ、嬉しそう

「済まない、緋真。爺様が無理を言って」

婚礼が済み、直ぐに床に伏せた緋真に頭を下げる
「良いんです、白哉様。私は幸せなんですよ」

夢げに笑う緋真

こちらに手を出すが、その手すら震えていて

その笑みは今にも、消えてしまいそうで

それが私は恐くて、思わず手を握りしめてしまった

『もひ、帰りません？流石に今出たら相当怒られ読めませんよ』

『あー、そうじやな。悪いことしたの?』

『今見た記憶は永久追放の方向で』

『さあ、夜一樣逃げますよ』

『碎蜂。大きな声を出すでない』

どうやら、大きな鼠が居るようだ

「・・・千本桜」

『碎蜂さんの所為でバレタじやないですかー?』

『なッ！？最初に声を出したのは杏里だろ？がー!？』

『一人共、置いて行くぞ?』

『『わつ!待つて下さい夜一様』』
ギャーギャー騒ぎながら去つていく
・・・・・あの馬鹿共め

「クスッ。楽しそうな人達ですね」

私はそうやって、無邪気に笑う雫真が見たかったんだが
どうやら、先を越された様だな

「今度、お前が元気な時に呼ぶか?」

「ハイ。お願いします。白哉様」

杏里君、散歩編？ 結婚式の案内（後書き）

ぶつむやけると、白兄さんと嫁の会話で一本書きたい

時代設定？もう、ガン無視で良いでしょ、う

書きたくなったんで書きました

・・・・・ もう一回、アニメ見直さないとなあ

殆ど忘れてるし

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）（前書き）

そうか、 いじりのを[冗長]といつんだな
最近、妄想が垂れ流しこなつて困るなあ

一応、これで過去編はお終いです

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）

「魂魄消失事件の説明」

「何か魂魄が消える事件だそうです」

「そう。そして、何故か服だけ残つているといつ恐ろしい事件」

「お主等は何をしておるのじゃ？」

「おや、夜一さん

「いやあ、仕事も一段落ついたので暇潰しこ

「以外に面白いですよ」

「ほう。ならば、儂の仕事も手伝わせてやるつ

「ええ～」

「また、書類溜めたんですか？」

「分かりました」

「そついえば、杏里。情報は集まつたのか？」

「いえ、檻理隊かんりたいの皆が頑張つていますけど
大した情報は集まりませんね

「隊首会の方はどうでした？」

「「」の件に関しては幾つかの隊長・副隊長が動く「」になった

「へえ」

ついに隊長達が動きますか

「何番隊ですか?」

「九番隊じゃな」

拳四ちゃんのところですね

さてさて、面倒ですねえ

スペツと解決つて訳にはいきませんかねえ

「どうしますか、夜一樣?」

「喜助に誰か使いにやらせるかの?」

「じゃあ、ひよ里ちゃんを使いましょう!」

「猿柿副隊長を、どうするんだ?」

「知り合の方が何かと良いでしょ!」

「と、言つ訳テス。ひよ里サン行つてらっしゃー」

「何がと、言つてやねん！…ええ加減にせんとホンマにシバクぞ、
ゴリラッ！」

相変わらず、元気な人ですねえ

「拳西さんの手伝いに行つて欲しいんですよ」

「ウチやのうてもええやん！…他にも暇そつなんおるやん…？」
まあ、居ますが

科学技術開発局には居ませんよ

「ぶつちやけると、ひよ里サンのことを頼りにしてるんでお願いで
きマセンか？」

ぶつけやけ過ぎです。喜助さん

ゲーム風に言つて

あすけばぶつちやけた

ひよりはてれている

いつかはばつぐんだ

て、といひです

ひよ里をみて、

「ジンティンっぽくありますわ？」

「わかりマスよ、杏里サン！それが、そこがいこんドース…」

いや、そんな拳握り絞めて叫ばないで下さい

「喧しいわー！」

ドロップキックって、ひよ里さん

「まあ、いいや。何か疲れたし、いつてらっしゃい」

「ああ、いつてきたるわ」

「あいたた・・・・・・・・・。全くひよ里サンにも困ったものデス
ね」

いや、今のは貴方が悪いでしきつ

「それじゃ、喜助さん」

「ええ」

『彼らの無事を祈りましょ』

side out

拳西 side

「けんせー。あつちに死霸装が落ちてたよ」

死霸装だあ？

「ねえねえ。この死霸装着てた人達何処行つたのかな？ねー、けんせー？」

少し、黙れ

白が持つてきたのは、総隊長に探すように言われた隊員の死霸装だ

つた

「隊長、いつやどつこつ事だと？」

「新手の病氣の可能性もある。十一番隊に通達して人を回してもらえ」

「お前等一今日はここに陣を張るぞー。」

「はい！」

別れて陣の作成に励む奴等を尻目に、白は眠っていた

・・・・・・殺してえ

s i d e o u t

杏里 s i d e

「皆さん、よく集まつてくれました」

「皆の者すまないな」

二番隊隊員のほぼ全員が参加しました

やつぱり碎蜂さんが、声かけたからでしうか

まあ、刑軍は夜一さん直属部隊なので居ませんが

『何の御用でしうか?』

「簡単に言いますよ。今から、五番隊副隊長 藍染 惣右介と同隊
隊員 市丸 ギンを拘束して頂きたいんです
さて、反応はどうですかね?」

『質問があります』

「おお、流石は一番隊ですね
冷静に聞き返してくれます

『何でしょ?』

『拘束する理由は?』

「今回の魂魄消失事件は知つてゐるな」

おや、碎蜂さん

代わりに説明してくれるんですか

『はい』

頷く一同

「首謀者は五番隊副隊長 藍染 惣右介ではないかといふ情報を得た」

『!?!?!?』

混乱中です

「さて、藍さん。理由は分かりましたね」

「それでは、行つてらつしゃい」

言い終わる前に全員がその場から消え去り
残つたのは、俺と碎蜂さんだけになりました

「杏里、本当に藍染が黒幕なのか?私にはとてもそういうは思えないん

だが

いや、まあ

俺も犯人だとは思つてませんから

「疑わしきは罰しろと昔から言こますからねえ」

『言つた瞬間蹴られました

まあ、確かに俺が悪いんですがね

「お前は、そんな理由で副隊長を拘束するのか！？」

言い訳をしようと口を開きかけ

窓から地獄蝶が入ってきたため、注意が逸れる

「と、少し待つて下さい」

碎蜂さんに一言断り、外に出る

「どうしました？」

『西東副部隊長。先程、藍染副隊長の拘束を完了しました』

おや、意外に速いですね？

抵抗も無かつた？

おかしいですねえ

「何かおかしな点はありますか？」

『はい。一つ』

「何でじょう？」

『藍染副隊長が、自分は頼まれただけだ。と』

おや？

惣右介さんはそんな戯言をほざく程度の器では無いはずですが

「誰に頼まれたと、言つていまししたか？」

『藍染副隊長』本人に頼まれたと
はい？

・・・・・・・・・・」
「全部隊に通達して下さい。今夜、あつたことは他言無用、墓の中まで持つていくこと。それと、今から任を解きます。逃げ切りなさい。後、彼の記憶を封じなさい。方法は問ません」

『宜しいのですか?』

「いいんですよ。何か言われたら、俺が責任取りますし
別に死神だけで食つている訳ではありませんし
この程度で処刑にはなりませんし
「市丸 ギンの方はどうですか?」

『現在、調査中です。今は森にまで手を広げていますが、芳しくありません』

何処に行つたんでしょう?

「因みに拳西さん達は何処に?」

『「鬼界の森です』

もしかしなくとも、負けですかね
今から行つても間に合いませんか
「後は、何がありますか?」

『いえ。以上です』

地獄蝶を離し、踵を返す

「どうだった?」

「全く駄目です。というか、下手を打てばバレます。今回は、静観ですね」

「次は尻尾を掴めよ」

ええ

次回は、逃しませんよ

side out

藍染 惣右介 side

「どないしたん、副隊長?..」

「いや、鏡花水月に違和感を感じてね」「まさかバレタなんて事はないと思つが「不安要素が出てきたようつだ。計画を急いで」

「ほな、どないします?..」

確かに平子隊長達への実験は、急がせる訳にはいかない
が、実験台は他にもいる

「ギン」

「行つてきますわ」

ああ、沢山捕まえてきてくれ

『藍染様』

要か

「何かあつたのかい?..」

『浦原 喜助と握菱 鉄裁がこちらに向かってきます』

ほう、浦原喜助が

そして、ギンじょうつかな？

「要、ギンを呼び戻してくれ」

要の気配が消えた

早めに戻つてきてくれるとな楽なんだが

side out

とある警邏隊隊員 side

「おい、部隊長から撤退命令が出たぞ」

「どういじりとだ？」

市丸ギンを補足して、これからつて時に撤退だと

「どうやら、裏をかかれる可能性が出たらしい。これ以上は自殺行為だ」

「しかし、『見つけたで』…………！？」

見つかっただー？

まさか、靈圧も完璧に消したはず

どひじてー！

「ほな、さにならや」

刀身が真っ直ぐ、俺に伸びていき
腹に吸い込まれた

「ガツー！」

そして、刀を首筋にあてがい引く、ただの作業だといわんばかりに

繰り返し同僚を殺していく市丸ギン
それが、俺が見た最後の光景だった

side out

杏里 side

修行場にて、夜一さん達を発見しました
「取り敢えず警戒解いてくれません? 突き出すつもりがないのは分
かってるでしょ!」

「杏里サンよくこい」が分かりましたね
まあ、暇つぶしにきたんですけど
「で、皆さんの様子は?」

「アタシを舐めないで下さいね。絶対救つてみせマスよ」
おお、喜助さんが燃えている
珍しい光景です

「杏里、本題はなんじや」
嫌そうな顔しないで下さいよ
「碎蜂さんに一言お願ひします」
真顔で言つたら、夜一さんがコケました
・・・・・本気で言つたんですがねえ

「相変わらずですね。杏里殿は
そうですかねえ?」

「碎蜂に一言と言われてもう。別にこれといつてないが」

「まあ、置いてかれる人に一皿」

「やうこつ言い方は卑怯じやと思ひんじやが。やうじやな、杏里代わざに謝つておこしてくれんか?」

「分かりました。碎蜂さんにおきます

「そして、喜助さん」

「何デスか、杏里サン?」

「ひよ里さんに謝つておこしてさご。『俺の所為で巻き込んでみません』と

「ひよ里サンを巻き込んだのは、アタシの所為デスよ?杏里サンが最善を尽くしたのは皆知つていマス」

「それでも、誤つておきたいんですよ」

「はあ、分かりました。伝えておきマス」

「杏里サン。アタシからも一言こいデスか?」

「おや、喜助さんからですか?」

「無茶をしないで下サイね」

「ん~。まあ、適当にやつますよ。それでは、またいつか

瞬歩で修行場から飛び出し、二番隊舎に向かつ

れて、仕事頑張りますか

「碎蜂さん。大丈夫ですか？」

あの件の後、夜一さん達がいなくなりました
で、碎蜂さんが引き籠っています

・・・・・伝言伝え忘れました

「碎蜂さん？」

戸を少し強めに叩き、中の様子を伺つ

反応すらない

靈圧は部屋内で固まつてしまいし、死んでいるわけではなさうですが

「碎蜂さん、入りますよ」
戸を開き、中に踏み込む
そして、部屋の中を見回し

入ったことを後悔した

「・・・・・・碎蜂さん、夜一さんのこと好き過ぎでしちゃう

先ず、目に入るのは夜一さんの全身画（笑顔▼eｒ）

次いで、右に視線をやれば何処で見つけてきたのか、夜一さんの猫姿の写真集

左には、人間時の夜一さんのポスターだの、写真だのがもう壁一面にベタベタと

そして、碎蜂さんの寝床の周りには夜一さんの人形と何故か俺の人形その人形二体に挟まれている碎蜂さん自身の人形

帰りたくなりました

俺は踵を返し、そのまま帰ろうとした時に声をかけられました

「あ、杏里？ その、な。これは違うんだ、だから、違うんだ！」

碎蜂さん

何が違うのかは俺には欠片も分かりません

狼狽した様子で、ワタワタと手を振り回しながらこちらの進路を妨害する碎蜂さん

寝間着のままで来ないで下さい

目のやり場に非常に困ります

いや、入った俺が悪いんですけど

「取り敢えず、服着てから話しましょう」

何か言い訳？ みたいのを必死に話していた碎蜂さんに声をかける

どうやら、今の自分の恰好に気付いた様です

「で、出でけ

つー?」

蹴り出されました

取り敢えず、真っ赤な顔した碎蜂さんを脳内保存してきます

「も、もういいぞ」

まだ若干顔が赤い碎蜂さん

「部屋片付けたんですね」

ポスターだのなんだのがすっかり無くなっています

「忘れる」

首筋に光る刃と彼女のマジな顔が非常にナイス

「はい。きつちり忘れさせて頂きます」

「で、今日は何の用で來たんだ?」

「夜一さんからの伝言を伝えにきました」

お、固まりました

「今、なんと言った?」

「夜一さんからの伝言を伝えにきましたと、言いました
瞬間、碎蜂さんが泣いてしまった

・・・・・ 何ででしょ「うねえ

「碎蜂さん。どうしました？」

「グス・・・・・・だ、大丈夫だ・・・・直ぐにお、治まる・・・・
・ヒック・・・・」

「碎蜂さん。俺は外に出ますから、また暫くしたら、声をかけて
下さい」

泣き顔なんて見たくないんですよ
碎蜂さんは、いつも凛としていて恰好良くて、それでいて可愛い
反応を見せてくれる
いつもの碎蜂さんに戻つて欲しいんです

「あ・・・・・杏里！ 行くな！ お前まで、行つてしまつと私は・・
・・・・・私は」

泣きつかれました

さて、俺の取るべき行動は

- 1 · 抱きしめて慰める
- 2 · 無視して外に出る
- 3 · 碎蜂さんの泣き顔をじっと眺める

俺の脳味噌はちゃんと機能してるんでしょうか？
・・・・・・・・・ 碌な選択肢がありませんねえ

2は論外ですね

3は心惹かれるものがありますが、後が怖いんで
まあ、普通に考えて1ですね

「硯蜂さん」

肩に手を置き、碎蜂さんの顔を正面にじもうてきて、そのまま抱きしめる

「ああああああああああああああああ」

杏里君、散歩編？ いやあ、黒いですね（腹が）（後書き）

最後、いつたかねえ？

次回から、タイトルが杏里君、教鞭編になります

杏里君、教鞭編　？ 誰ですか？妹？ そうですか（前書き）

最近、『東方陰陽鉄』ブロントさんが幻想入り』を見てハマった作者が通ります

杏里君、教鞭編　？　誰ですか？妹？そういうですか

「白兄さん。俺に用とはなんですか？」

取り敢えず、仕事中に呼び出すのは止めてトセー

「今日は兄に頼みがある」

「頼み？」

珍しいですね

「靈院で、教鞭を取つてもらいたい」

・・・・・・・・・・・・はい？

「俺の聞き間違いでないなら、靈院で教師をやれと、聞けました
が？」

どうか俺の聞き間違いであつてトセー

「そう言つたのだが

無情にも、白兄さんは俺の望みを断つてくれました

「理由はなんですか？」

「私の妹を見守つてしまいたい
はい？」

side out

朽木ルキア side

「朽木さん。今日、拳の実技の先生が変わったらしいよ

「どうじつことだ？ そんな急に変わるなんて」

「なんでも一身上の都合とか」

「ふむ？ どうじつことだ？」

二人して頭を捻るが答えなど出るはずもなく

暫くして、その時間がやつてきた

仕方なく私たちは授業を行う第三格技上に向かう道場の門を潜り、前方に視線を向ける

遠くに一人の人間の影を見つけることが出来た
多分、あれが件の新任教師だろう

ある程度まで近づくと口を開き

「あー、貴方達も授業ですか。大変ですねー」

そんなことをのたまつた

・・・・・・・・・・・・・・
変わった奴だ

「皆さん。宜しくお願いしますね。俺の名前は西東 杏里です」

杏里か
いや、一応教師なのだし
西東か？

「さて、講義を始める前に一つ言つておきたいことがあります」

「俺は貴方達が死神になりたいと願つてここに来た、と聞きました。
だから、俺の授業中にサボる人にはそれ相応の報いを受けてもらいま
す」

『具体的には?』

「そうですねえ。1・2番隊への実験台とか書類が溜まりまくつ正在る8番隊への応援とか後は、俺の実験台になるとかですかねえ」

『それは『褒美ですか?』』

『われわれの業界では『褒美』です』

「誰ですか、こんなに入れれたの」「嫌そうだな
私も嫌だが

『え　　ツ！?』

「あー、もういいです。では、これから、簡単なテストを行います」

「今文句言つた人達、前に出なさい。顔を覚えますから
怒らせたかな?」

まあ良いわ。私には関係ないからな

「さて、テストと言つても誰でも出来るものです」

『せ　せんせー！？これ何時解いてくれるんスか！？』

「何時縛道をかけたのだ?」

全く気付かなかつた

「あー、なんか前に出た瞬間に」
早業だな

「俺が反省したと思うか　この講義が終わるか　あなた方が打ち破るかしたら」

『やつべー、このせんせー結構キツイ……』

随分と余裕だな

「なんなら詠唱アリの縛道にしますか？」

『遠慮します』

「なら、静かにして下さい。テストは単純明快、俺から一本取る。それだけです」

・・・・・かなり厳しいのでは無いか、それは？

「あ、もちろん。手加減しますよ。具体的に言つと席官に入れる程度の靈圧でります」

・・・・・それもかなり厳しいと思つが

まあ

「面白いではないか」

「おや、やる気になりましたか。名前を聞いておきましょう」「こちらに顔を向けて嬉しそうに笑う西東

・・・・・地雷を踏んだか？

「私の名前は、朽木 ルキアだ」

「成程、貴女が」

確かに良く似ていると、意味の分からぬ言葉を発しながら頷く西東何に納得したのか、ひとしきり頷いてこちらに向き直り、足を引い

て簡単な構えを取る

「さあ、かかつてきなさい。ああ、なんなら全員でもいいですよ?」
不敵な笑みを浮かべる西東とそれを聞いていきり立つ級友達

さて、どうするかな?

side out

藍染 惣右介 side

「ギン。今年の靈院入学者に田ぼしい者はいたかい?」

「ボクとしては、藍染隊長の意見を先に聞きたいな」

「ふむ。それでは、今年の新入生の中からは」の一人を取ろうと思
う

「そう言い、手元に持っていた書類をギンの手元に放る

「これは?」

手に取り、書類を眺めるギン

「今年の入学者の一覧さ」

まあ、まだ細かいことは不明だが

それは卒業までに調べればいい

「へえ。なら、誰を取るのか教えてもらても?」

「構わないよ。要も聞いていてくれ」

「ハツ」

相変わらず硬いね

「さて、僕たちが新たに加えるのは、雑森 桃 吉良 イズルの二人だ」

写真が移った紙面を渡す

「役に立つんですか、こんな子供がボクにはとても思えないんやけど」

「私もそう思いますが」

「二人の意見はもつともだと思うが、僕は彼ら一人が僕たちの計画にとても役に立ってくれると信じている」

「藍染様がそうおっしゃるなら」

流石は要だ

良く引き際も分かっている

「そやね。隊長には自分の考えがあるんやろ」「ふむ、ギンが大人しく手を引くのは珍しいな
「ボクはボクの考え方で動くで」

「別に構わないよ。大局が変わらなければね」
さて、少し忙しくなるかな

side out

碎蜂 side

(今日の隊長「H H 何があつたんだ? 西東の奴も居ねえし）

「大前田。何を怯えている?..さつさと仕事をしない」

「ハイハイハイ！」

全く杏里の奴は何処に行つたんだ

side out

杏里君、教鞭編？誰ですか？妹？やつですか（後書き）

碎蜂つて、この時期隊長？

次回は、もう少しルキアと絡ませて
雑森なんかも出す予定です

ルキアと恋次つて同じクラスだと思つてたんですね
過去の話がチラッと出たとき驚きました

杏里君、教鞭編 ? 元気ですねえ（前書き）

吉良君が話に絡ませにくい
卒業編くらいで出したいなあ

杏里君、教鞭編　？　元気ですねえ

杏里 side

「さて、今回も目立つた動きはありませんか」「中々、尻尾がつかめませんね
警邏隊と櫻理隊でもつかめないのは相変わらずですか
さて、次はどうしますかねえ？」

「やつぱり、頭のいい相手を敵にすると大変ですねえ」
うーん

あ、背骨鳴った

報告書を何度も読み返しても特に変わりはなく
院生相手の講義にもなんとなく慣れてきて
力はないでいい感じに力が抜けて
お茶を落ち着いて飲めるくらいになりましたね

と、誰かきましたね
「開いてますよ」
扉に向かつて声をかける
「失礼します」
扉を開けて入つて来たのは、朽木ルキアさんでした
おや、珍しい

「何の御用ですか？」

「私のとも・・・・知り合この人」と

ふむ?

阿散井恋次さんのことですかね?

「セイ、どのよつな!」とですか?」

「実は、おかしな声が頭から響いてくると」

おや?

これはひょっとして

斬魂刀ですかね?

ふむ、時期としては若干速いですか
まあ、面白いかもしません

ああ、どんな刀なんでしょうね

「と、そういうれば誰が」

「雛森 桃です」

雛森さんですか

確かに彼女は優秀ですが

そうですか

さて、どうしますかねえ?

・・・・・少しづめかり背中を押しても駆せ出たまんか

「あの、教官?」

ん?

「ああ、すいません。少しばかり考え方をしてました」

「それで、どうしましょつか？」

んー

「ここに呼んで下さい。そのお友達を。ああ、知り合いは沢山いた方が緊張しませんかね」

side out

雛森 桃 side

えーっと

「朽木さん、西東先生が何の用だつて？」

暇だからいいけど

「うむ。雛森が前に話していた声のことを話してみたら連れてきてほしいと言われてな」

えつー？ 話しかやつたの？

「気のせいかもしれないから誰にも言わないでつて、言つたのに…？」

？

「はつはつはつはつはつ、気にするな。ほら、着いたぞ」
そう言い朽木さんはわざと扉を開けて入つてしまつた
どうしそう、このまま逃げようかな？
でも、悪いしなあ

「何やつてんだ、雛森？」

「ひゃあ！？」

突然、後ろから声をかけられ慌てて振り向くと阿散井君が心配そうにこっちを見ていた

「え、な、何が？」

「だつて、ここ西東の住処だろ？こんなところに何の用があるんだ？」

うーん、相変わらず西東先生のこと嫌つてゐるなんでだろ？

「うん。なんか呼ばれてて」

苦虫を噛み潰した様な顔をする阿散井君

阿散井君が何か言おうと口を開きかけたとき入口から西東先生がこちらに顔を出してきた

「ん？ おや、阿散井さんも一緒にですか。どうぞ、お入り下さー」

うー、逃げ道がなくなつていぐよー

阿散井君がすぐ不機嫌です

吉良君とか来ないかなー

西東先生の先導の元部屋に入る
部屋内には調度品の類は殆どなく
窓は開け放たれ、外の景色が眼に優しい

特に眼を引くものは・・・・・・・ないといいなあ

「オイ、西東。これはなんだ？」

「なんだつて、結界ですよ。非常に簡単ですがね
結界なんて何に使うんだろ？？」

「さて、雑森さん。この中に立つて眼を閉じて下さ
え、あ、はい

言われるままにその結界の中に入り眼を閉じる

瞬間、意識が遠のくような嫌な違和感が身体を駆け巡る

「グツ・・・・」

「ああ、成功ですね。そのまま樂にして下せ」

「オイ、雛森！速くそつから『邪魔はさせませよ』…………テメエ！？」

え、何があったの！？

「恋次、諦めよ。西東に本氣で来られではたまるまい」

「チツ」

うーん。眼開けてもいいのかなあ？

「雛森さん。そのまま自分の内に意識を向けて下せ」

「分かりました」

氣になるなー

まあ後で聞けばいいか

うーん、内と言つても

何も無い気がするんだけど

？

声？

もつと聞いつと意識が集中し、途切れた

side out

杏里 side

「わいわい、どんなものが出来るんでしょうねえ」

ああ、楽しみですね

おや、びひしました阿散井さん?

「どひこひつもりだ?」

うん?

「西東よ。先程は止めたが、狙いはなんだ?」

朽木さんですか

わい、びひつ説明しまじょつかねえ?

『西東分隊長、お手紙です』

あー、仕事ですか?

『隊長からの手紙です』

うん? 碎蜂さんから?

何の用でしようか

「ふむ。それでは、少し待つていて下さい」

机にある要らない紙面の裏に更々と書きつけひとつと

「これを碎蜂さんに渡して下さい。後は、隊長たちの素行調査でもしますかね」

『御意』

さて、手紙は

「オイ」

「何ですか？まだ雑森さんは起きませんよ」
声は聞こえたはずですが

「セツキのはなんだ？」

何かおかしなところでも？

「俺の同僚ですが、なにか？」

「あれは一一番隊の隊員だろ？」「…」
うーん？何が言いたいのでしょうか？

「それが何か？」

あれ、頭抱えてどうしたんです？

「だーかーらー！なんで西東が一一番隊の隊員と同僚なんだよー。」

「西東はこここの教員だろ？何故一一番隊と面識があるんだ？」

んー？

「俺が一番隊に所属しているからですよ。ついでに元アーティスト今年で三
席になりました」

まあ、席官になる前から比べてもそんなに変わった気はしませんがね

おや、どうしました？

まあいいでしょう

さて、雑森さんはつと

ふむ。靈圧が上がりましたね
もつ直ぐといつたところでしょ、つか

手紙の中身はつと

・・・・・・・・・・思わず空を眺めて黄面の
その後、片手で額を覆い、溜息を吐く
・・・・・・余り可愛こじとを書かなこで下をこよ、碎蜂さん

『弾け、飛梅』

おや、出来ましたか

さて、そう対処しましちゃうかね？

「西東先生」

はい

「有難う御座いました」

ん？

雛森さんが深々と一礼して帰つてきました

うーん？

「まあいいでしょ、さて、朽木さんも阿散井さんもお帰つてから

何時までも固まつてないで

俺はこれから碎蜂さんと大事な予定が入つたので先に帰りますよ

「くつ？あ、ああ。恋次帰るか」

「お、おひ

そして今日も可愛い蟀さんを眺めるといまますか

杏里君、教鞭編　？　元気ですねえ（後書き）

そろそろ碎蜂に会いたくなつたので、次回は碎蜂との絡みです

聞きたいんですが、一応、尸魂界篇と破面篇はやる予定ですが、その間に当たるアニメオリジナルをやつた方がいいですか？

やつた方がいいなら　1　を

やらないで欲しいなら　2　を

押して送つて下さい。

期間は次の話が投稿出来た時までです

お手数ですが、宜しくお願ひします

杏里君、教鞭編　？ 可愛いなあ（前書き）

？

危なかつた

読み返したらR18指定だつた

杏里君、教鞭編　？ 可愛いな

「さういえば、碎蜂隊長」

「どうした、松本？」

「その指輪どうしたんです？」

「あ、え、これは、その、な、なんでもない…」
クソッ。外し忘れた！私としたことが

慌てて後に隠す

「妖しー、何々、杏里からの送り物だったりします？」

「何故分かつた！？」

「これは面白くなつたわね。碎蜂隊長、その時の様子話して下さい

よ
に、逃げ道は？

「逃がしませんよー」

「絶対言うものか
！」

「フツフツ。あ、観念して下せー。ああ ああ ああ…」

松本が恐い

side out

杏里 side

「平和ですねー」

「ああ、隊長は会合で暫く戻らないだろうしな。と、茶が切れたな。
西東もいるか?」

「ええ。頂きます」

さて、今田はどうしますかねえ?

「やういえば、さつきから西東は何を読んでるんだ?」

「んー、各隊の隊長の素行調査とかですかね」
具体的に言つと各隊長の過去の行動やらですね
流石に詳しいことは分かりませんし、繋がりも見つかりませんが
ああ、惣右介さん辺りなら、情報操作出来る可能性もあるんですね
これは失敗でしたかね

今度は、七番隊と九番隊を中心に攻めますか?
正義バカが気に入りませんし

それとも、真子さんたちからの情報待ちですかね?

動いて眼を点けられるのも癪ですから

「お前が小難しいことしてくれるとお蔭で、俺は助かってるんだぜ」
おや、嬉しいことを言つてくれますね

「あれ、お前指輪なんてしてたっけ?」

「ん?ああ、この前碎蜂さんと買い物に行きましたね」

可愛かったですよ

「ふーん。まあ、ノロケ話ぐらいなら聞いてやるぜ。今の仕事も一

段落したし

おや、それは嬉しい」と

「それでは、碎蜂さんの可愛らしさを語りせりて頑あましそうつか！」

「うう、後で覚えていろよ。松本

あれは、この前の休みの時だつた

私は、休みの日にいつもやつてている様に杏里の家に朝ごはんを作りにい・・・・・

わ、笑うなー良いだる、別に私がご飯作つてもー
・・・・・あ、杏里も喜んでくれるし

「くくっ。い、いえ。べ、別に良いですよ。そのまま続けてトモー^{トモ}
(か、可愛い。碎蜂隊長、めつちや乙女やつてる)

コホン。その日は杏里が珍しく起きるのが遅くてな
私が起こしに行つたんだが

そ、その杏里に部屋に入つてーーー

「あー甘こ甘こ」

う、煩い！

「それで、杏里の部屋に入つて、どうしたんです？」

え、えーっとな

杏里が布団に横になつて、その、気持よれやうに寝ていてな

「ふむふむ」

その、起こすもの可哀そだと思つてな
そのまま、起こさず置いていたんだが

「へタレだ
！？」

だ、誰がへタレか！

「何、言つてんですか！？そこは、優しく起こすなり
寝るなり キスするなり色々あるでしょーがー！」

そ、そんなキスなんて／＼／＼

「なんでそこで赤くなるんですー？もつキスの一回や一回はしてま
すよね？！」

し、してないぞ！

精々あーんしたり、膝枕で一緒に寝たりしただけで

「そつちの方が恥ずかしいですよー！？」

そ、そうか？

確かにあーんはレベルが高い気がしたが

「うわ、結構なバカッフルやつてるーー?」

なつー?

誰がバカッフルだ!!

「はつきりと言えますが、貴方達です」

そ、そろか

「何故テレるし」

えーっと、何処まで話したつけ

「杏里を起こしに行って帰つて来たところまでです」

そうか、それなら杏里が起きてきたところから話すとしようつか

side out

杏里 side

この前の休みの日の話です

「へえつて、三日前じゃねーか」

ええ、何か問題でも?

「いや、別に。んで?」

ええ。実は碎蜂さんが、自分が休みの日に毎日朝食を作りに来てくれるましてね

「爆ぜろー。」

?

良く分かりませんが

いい匂いがしたので、寝床から出て居間に行くと、碎蜂さんがソファソファしながら待ってたんですよ

「なにそれ、可愛い」

ええ、もう毎回思いますがあの人は俺を萌え殺すつもりなんですかね？

それで、顔を洗つて一緒に朝食を食べたんですよ

「ふーん。碎蜂隊長の料理つてアンマ想像できねーけどな
いえ、結構美味しいですよ

最初なんて、指を包帯と絆創膏まみれにしながら食材と格闘してましたからね

もう本当に抱き締めたかったですね

「朝飯のメニューは？」

えーっと、鯖の味噌煮に白米に卵の味噌汁、後は簡単な野菜の詰め合わせですね

「普通の朝食だな」

ええ。それを碎蜂さんとあーんしながら食べました

「うわつー殴りてえーーー」

ええ。これが俺じゃなかつたら、俺は俺を殴つていたでしょうね。
・・・・・・・・・・割と本氣で

「んで、次は？」

「一人で皿洗いを

「いや、そこはいい」

それでは、一人で買い物に行つた話を

side out

碎蜂 side

「で、一人でラブい空間を作りながら皿洗いしたと」

うむ。それより、どうした松本？そんなに疲れた顔をして？

「いえ、なんでもありません。どうぞ、続けて下さい」

（失敗したかなー。まあ、碎蜂隊長も嬉しそうだし。仕事サボる口
実になるから、いつか）

その後、杏里と買い物に行くことになつてな

「何買いに行つたんです？」

食材と・・・・・この指輪を

「へえ

（杏里、どうやつたんだろ？指輪なんて碎蜂隊長受けとらないと思

うんだけど)

皿洗いも終わって、杏里と居間でボーッとしてたんだが
杏里の奴、いきなり書類持ち出してきて整理を始めたんだ

「杏里つたら、相変わらず真面目ですねー」

うむ。暫くそれを眺めていたんだが
その、暇になつてな

「といふか、杏里は彼女が皿の前にいるのになんで仕事なんかする
んでしょう?」

まだ付き合つてない!

それで、杏里の横に行つて氣を引いひと思つてな

「何したんです?」

裾を引っ張つた

「は?」

だから、裾を引っ張つた

(か、可愛い!)

「で、杏里の反応は?」

うむ。笑顔でこぢりの顔を見てくれてな
頭を撫でながら、謝つてくれた

それで、一緒に買い物に行くことになつたんだ

「へえ。とこつ」とばドームになるわけですね」

思つていても口に出すな！」

考えないようにしてたんだから！」

「食材はどちらもいいんで、指輪を買った話をお願ひします
(碎蜂隊長、顔緩みまくつてなんだけど。キャラ違つなあ)

む。それでは、ある程度食材も買ったから、帰らうとしたときにな

ある店を見つけたんだ

「へえ。どんな店です？」

その店はさぞや、えーっとなんて言つんだ？

あの指輪だの首輪だのを売つてこいる店

「あー、あの店ですか？あの店は屋号ありますよ。『指輪屋』
だの『飾り売り』だの言つてます」

ふむ。何故かその店に強く惹かれてな
中に入つて、店内を見回したんだ

「あの店って、色々置いてありますけど、指輪に無駄に宝石つけて
ないから結構人気なんですよー」

そうなのか？

まあ、派手なのは好みじゃないからいいんだが

「で、杏里とそれをペアで買つたんですか？」

いや、杏里のものは素材は私の物と一緒にだが、銀細工に金で風の彫
り物がある

「碎蜂隊長の物は、光らないように彫り物がありませんもんね」「ああ、これも杏里が選んでくれたものだ

店主と杏里が何か話していくな
私は店内を好きに見させてもらつたわけだが
中々変わつた店だな、あそこは

「ええ。何故か、砥石や漬物石も売つていますからね。多分、石と
名のつくものを全てを集めたつて感じのところですからね」
本当に変わつた店だな

ああ、だからか
ご婦人方もいらしていたから、なんだと思つたんだ

で、杏里が店主から何かを受け取つてな
こちちらに持つてきたんだ

そして、私の手を取つて

今日一日付き合つてくれたお礼だと言つて、指にはめてくれたんだ

もう嬉しくてな

「はー、紳士ですねー杏里」「うむ。因みに右手の薬指だな

side out

杏里 side

「爆発しろーー！」

はい？

どうしたんです、いきなり

「いや、叫ばずにはいられなかつただけだ」

本当に今日はどうしたんです、希千代さん？

「いや、他人のノロケ話がこんなに殺意が湧くものだとは思わなくてな」

そんなもんですかねえ？

「で、買い物はいいから、指輪の話をしてくれ」

それでは、貴金属店に行つたところから

「いや、指輪を渡された隊長の反応を」

むう。

仕方ないですね

その店店主から田立たないで、送りものとしては、そこそこ喜ばれる指輪をいくつか出してもらいまして

それで、俺が気に入った物で碎蜂さんに似合いそうな物を選びまして

碎蜂さんが、店内を回つてこるのを発見しまして
右手を取り

「ん？ 左手じゃないのか？」

左手なら、もつと場所を選びますよ

「それもそうか」

ええ。その時の碎蜂さんの様子は

顔を真つ赤にしながら、じちらを見詰めてきて

もう可愛いのなんの

「落ち着け西東」

大丈夫ですよ

その後、真っ赤になつた碎蜂さんを連れて帰る時に修兵さんに会って
ましてね

「…………えーっと、新しい胃薬は何処だっけ?」

そつちの一段目の棚です

「後で渡しに行くか

お願いしますね

「んで、そのまま帰つて解散か?」

はい。最後に軽く耳元に

「いや、もう聞かん」

おや、それは残念

それでは、残つた仕事を終わらせるとしまじょうか

side out

碎蜂 side

その後、私は赤い顔を見られない様に隠しながら・・・・・・・・

どうした、松本?

机に突つ伏して

疲れたなら、お茶を入れてやろうか?

「いえ、いいです。それより、もう終わつたなら帰つていɨですか

?」

(誰か、助けて。隊長、今助けてくれるなら、仕事しますよー!)

ふむ。なら帰路につき

杏里の家の前まで来た時にな

杏里が突然、私の耳元に唇を近づけ

「ストップ！！もーいいです！もーけつーーです！」
む？ どうか、残念だ

それでは、私たちも仕事に戻るとしよう

（助かつた～。碎蜂隊長じゃなきや、絶対逃げれてないわよ～）
？ 隨分と嬉しそうに見えるな
まあいい。意外に時間を食つたし、急いで戻るとしよう

杏里君、教鞭編　？ 可愛いなあ（後書き）

次は、杏里君の杏里君による卒業試験

杏里君、教鞭編　？ 卒業考査ですよ、全員集合（前書き）

焦つた

久しぶりに書いひつと思つたらネタが出なかつた

最近あつたこと

5?太つた

杏里君、教鞭編　？ 卒業考査ですよ、全員集合

杏里 side

「さてさて、卒業試験の内容…………。どうしますかねえ」「いつのこと十一番隊の何名かを呼んで勝ち抜きでもさせますか？でも、手加減しませんしねえ

いや、むしろ

骨でも折つてもらつた方が…………

いやいや、それなら虚でも呼んだ方が…………

そりですよー！十一番隊に虚を作つてもうえぱいいんです
非殺傷モードで

いや、実習でそれはやるはずですし

うーむ

どうしまじょうかね

「…………そりだ！俺の斬魂刀を使って…………。
死人が出ますねえ」

それか、狂人

いや、手加減して時間制限をかければ

1分は長いですかねえ

うん。30秒くらいでしてみまじょうか

それでは、早速許可を取りに行きますか

…………総隊長のところでいいんですかね？

side out

阿散井 side

吉良と一緒に飯を吃了てた時の話だ

「そろそろ、卒業考查だね」

吉良、嫌なことを思い出させやがつて
「そんなに嫌そうな顔をしないでくれないか。今日は実技中心だから、阿散井君は大丈夫だろ？」

「やうか？ 座学はボロボロの自信があるぞ。後、鬼道」

「本当に鬼道苦手だよね、阿散井君は
ほつとけ

「まあ、今回の試験は西東先生も本気みたいだから」と、阿散井君
?」

何だ、吉良？

「いや、凄い顔してたからね。全く何が気に入らないのかは聞かな
いけどや」

そんなに凄い顔してたか？

顔の表面を手で撫でながら

「ほつとけ。なんか気に喰わねえんだ」

「まあいいけどね。それじゃあ、準備を忘れないようにね」
そう言つて、吉良は席を立ち出て行つた

たれ、せひへやひへじがねえか

sideout

杏里 S i d e

「さて、皆さん。今日が何の日か知っていますね
まあ、試験当日ですが

隊長格呼んで来ての実戦演習とか、11番隊呼んで院生フルボッコとか

まいいでしょう

『腰に下げる刀について聞いても?』

「俺の斬魄刀の響華です」
うわあ、嫌そうな顔しますね。皆さん

『因みに能力は?』

そんなに怯えないで下さいよ

嬉しくなるじゃないですか

「それを教えたなら、テストになりませんからね。精々、怯えて下さ
い」

『試験内容はどの様な物のか聞いても良いか、西東?』

勿論ですよ、朽木さん

「これから、皆さんに行つ」とは他の院生に喋らないで下をいね。
喋られると非常にマズイので」

狂華の能力つて、知つてやると死ぬほどキツイでしょうし
それに試験内容バラされたら、困りますし

「試験内容は、俺がこの刀を解放してから30秒間耐えることです
おー、いい感じにテンパつてますねー

『ど、どのような能力か伺つても?』

「それを言つてはテストになりません」

「それでは、始めますよ。『狂え 韶華』」

刀を鞘から抜き、真っ直ぐに院生に構え解号を呴く

side out

朽木ルキア side

杏里が、斬魂刀を構え何かを呴いた瞬間に私の耳に何かの甲高い音
が響いてきた

何となく余り聞いていたくない音だ

・・・・・ルキア

兄様の声！？

『これって、悲鳴！？』

「ああ、気付きましたか。響華の能力は、貴方方の近しい人の悲鳴を聞かせ続けることです。因みに後、20秒ですよ」

えげつない能力だ

次は恋次か

気が狂いそうだ

side out

杏里 side

ふむ、意外と皆さんモチますねえ

15秒くらいで全滅するかと思つたんですが

さて、そろそろ30秒ですね

主よ。私の能力をもつと使っていただけないでしょ
うか？

主よ。私の能力をもつと使っていただけないでしょ
う

うーん、本気でやつてもいいんですがねえ

まあ、後5秒です

5 4 3 2

「さて、皆さん。お疲れ様でした」
響華を鞄に戻し、院生たちを眺める
ふむ。呆けてますねえ

うーん

「全員合格ですか、面白くありませんね」
もつ少し本気でやつても良かつたですかねえ？

「それでは、皆さん。お疲れ様でした。試験は終了です」
さて、お仕事お仕事

side out

朽木ルキア side

「やつと終わつた

地獄だつた

『・・・・・・・・卒業式に西東呼んでヤララねえ?』

『いや、不意打ちも効かんの。・・・・・・そつかー函を使えば

『勝手にやつてなさい。私ら諦めたわ』

正しい選択だと思つや

西東はそんなに恨まれる様な授業したかな?
精々、動けなくなるまでド突き倒したくらいだね
…………あ。だからか

「朽木さんは、これからどうする?」

「ん、西東の話なら私は遠慮するが」

「いや、やつむじやなくて
ん?」

「いや、西東先生のは終わつたけど他の試験も残つてゐから、ギリつ
するのかなーと」

ああ、そうこうとか

「これから、図書館にでも籠ると思つが

「流石は、朽木さんね。あんなことがあつた後でも冷静とは
いや、確かにきつかったが

「そんなにショックはないだろ?」

何故か、そんなにショックはない

「うーん? 確かに言われてみれば、やつかなあ?」

首を傾げ、こぢりを見詰めてくる

「やうだと思つた。少なくとも私はそつだ
それよりも

「明日の試験の準備をしなくていいのか?」

「んー、 もう少し休憩してから出でますよ」

そつか

うん。 明日も頑張るか

side out

杏里 side

「わたくし、 聞きでしたか。 左陣さんもあたりますかね
先ずは、 左陣さんから

「なんや、 西東か。 何しに来たんや」

鉄左衛門さんも相変わらずですねえ

「久しぶりですね。 左陣さんはいますか?」

「何や隊長に用かい。 隊首室じおんで」
有難うござります

れしゃれ、 どんな反応をしますかねえ

「失礼します」

一言断つて、 扉を開ける

綺麗な部屋ですね

書類もたまつてませんし

そして、相変わらず虚無僧の彼のアレ

「西東か、何の用だ？」

んー相変わらずの渋い声ですね
いつか生で聞きたいと思ひます

「今日は質問がありましてね」

「ふむ？珍しいな。そこにかけるといい」

有難う御座います

「さて、何を聞きたい？」

まあ、回りくどいのは嫌ですし

「左陣さん。貴方にとっての正義とはなんですか？」
真っ直ぐに左陣さんの手があるであろう部分を見る
「私にとっての正義は、元柳斎殿の手指す先にある」
ほう？

元柳斎さんの手指す先ですか
どんな正義かは、気になりますが
その内分かりますか

さて、流石に白ですね

味方を増やしている可能性も考えたんですがねえ

「そうですか。有難うございました。質問はこれだけなので、失礼

します「

席を立ち、出口に向かつ

「西東、私からも一つ聞いて良いか?」

後から声をかけられる

「どうぞ」

振り向き、左陣さんに向き直る

「西東が田指す正義とはなんだ?」

うーん。左陣さんの田が恐いですねえ

「そうですね。俺の正義は、今の様な生活を守ることですかねえ?
そんな大仰な目的なんてありませんし
「どうじことじことだ?」

「よつは、まよひよ。俺が仕事したり、碎蜂さんと遊んだり、春水さんと十四
朗さんと酒を飲んだり出来る空間の確保です」

「成程。そのような正義もあるのか」

いや、俺のは正義といつ程のものではないですよ

「ふむ。西東、参考になつた」

いえいえ

それでは、俺は帰らせてもらつますよ

「今度、隊長たち集めて酒でも飲みたいですね」

「私は遠慮をせてもりあつ

おや、それは残念

まあ、何となく声も柔らかくなつた気がするのでここでしお

「それでは、またいつか」

「ああ。またな」

side out

市丸 ギン side

「なあ、ちょっと行つてくるわ」

「隊長、仕事がまだ残つてますよ」

「氣のせいや」

「藍染隊長。今、ちょっとええですか？」

「ん。構わないよ」

「それじゃあ、さつあと本題に入らせてもらひこまます」

「西東君のことかい？」

「ええ。やつと動き出したみたいですね」

「ああ、これで潰せる」

「おお、恐い恐い」

「西東はんも可哀そつて」

でも、頭突っ込んできたんはそっちやで
死んでも恨まんといつてや

杏里君、教鞭編　？ 卒業考査ですか、全員集合（後書き）

後、一話か二話書いて本編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338m/>

目指せ！死神！BLEACH異端編

2011年10月7日22時25分発行